人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に活かす水俣学研究拠点の構築

平成22年度～平成26年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書

プロジェクト番号：S1091061
平成27年5月

学校法人名：熊本学園
大　学　名：熊本学園大学
研究組織名：水俣学研究センター
研究代表者：花田昌宣（社会福祉学部教授）

はじめに

水俣学研究センターは、2005（平成 17）年に設置され、原田正純先生を中心として、水俣学の構築を目指して研究調査、学内外の教育、社会貢献と情報発信に努め、発足してから 10 年が経過しました。本書は、2010（平成 22）年より 5 年に亘り実施された文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業：人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に活かす水俣学研究拠点の構築」の報告書です。

事業報告書としての性格として、当初の事業計画と目標をふまえて、得られた成果や達成度を社会に公表し、批判をあおぐことを課題として執筆されています。詳細な学術的成果や専門的な議論は、水俣学研究センターの刊行物や所属研究者が発表している成果物を見ていただきたいと思います。日常的な研究活動とその成果は『水俣学通信』や WEB ページ上に公開しているのでそちらも参照していただくようお願いします。

文部科学省には、報告書本文に加えて、過去 5 年間の水俣学のかかわる主要新聞記事なども資料として添付いたしました。ご供覧いただきたいと存じます。

この事業の活動は、被害実態の解明、地域戦略の構築、資料の収集とそのデータベース化および国内外への情報の発信をとおして、水俣学の研究基盤を構築・強化していくところに重点が置かれています。学内においては、学部や大学院と連携して、水俣学講義、フィールドワークや将来の研究者養成を行ってきており、また公開講座や公開セミナーなどによる私どもの成果の地域還元、水俣学ブックレットや『水俣学講義』などの刊行などによって成果公開も行ってきております。さらに、タイ、中国、韓国や台湾、カナダなどの研究機関や公害発生地域の NGO などとの交流も進めています。

地方私学にいてグローバルな視点とユニークな方法に立って、地域に根ざし地域の課題に応える調査研究、そして水俣病という人類史上の出来事に対する取り組みとして、私どもとしての自負と反省はあるものの、本報告書を通して、社会の負託にどこまで応えることができたかは、大方のご意見を伺うこととしたいとおもいます。

2012（平成 24）年 6 月 11 日原田正純先生が他界され、私たちの大事な支柱を失いました。水俣学の提唱者であり、常にその中心におられたので喪失感は大きいのですが、私たちは、原田先生の期待に応える水俣学の発展を目指しているところです。

まだまだ未熟ではありますが、さらに精進して水俣学の発展に努めて参りますので暖かいご支援を賜りますようお願いいたします。

水俣学研究センター長
花田 昌宣

目 次

第一章　研究組織と概要 1
第一節　研究プロジェクトの体制 1
第二節　研究プロジェクトに参加する研究者リスト 2
第二章　研究計画 4
第一節　研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要 4
第二節　研究組織 4
(1) 研究組織の概要と研究代表者の役割、責任体制及び参加人数 4
(2) 大学院生・PD 及び RA の人数・活用状況 5
(3) 研究チーム間の連携状況 5
(4) 研究支援体制 5
(5) 学外研究機関などとの連携状況 5
第三節　研究施設・設備など 6
(1) 水俣学研究センター 6
(2) 水俣学現地研究センター 6
第三章　研究成果 8
第一節　研究課題の概要 8
第二節　研究の成果の概要と内容 8
(1) 第一班 9
(2) 第二班 11
(3) 第三班 13
第三節　研究基盤形成としての目標と成果 17
(1) 研究基盤の形成 17
(2) 人材の育成 17
(3) 社会貢献 17
(4) 国際的発信と連携 18
第四章　評価と展望 21
第一節　優れた成果が上がった点 21
(1) 地元密着型の研究方法の有効性を示し得たこと 21
(2) 環境被害に関する国際フォーラムの成功と水俣学の国際的展開の基礎の形成 21
(3) 水俣学関連資料の収集と公開事業の進展 21

第二節　問題点 22
(1) 若手研究人材の育成について 22
(2) 研究テーマの拡張について 22
(3) 制度政策の変化と研究計画上の困難 22
第三節　評価体制 22
(1) 費用対効果と資源配分のルール 22
(2) 自己評価とその体制 23
(3) 外部評価委員会の設置 23
第四節　外部評価委員による評価 24
第五節　研究期間終了後の展望 29
第六節　研究成果の副次的効果 29
第五章　研究発表の状況 31
第六章　研究成果の公開状況 42
(1) 水俣学研究センター刊行物 42
(2) 水俣学講義 44
(3) 公開講座 47
(4) 研究会 49
(5) 公開セミナー 55
(6) シンポジウム 58
(7) 国際会議 59
(8) その他の研究成果等 63

添付資料：資料編

第一章　研究組織と概要

第一節　研究プロジェクトの体制

(1) 学校法人名
熊本学園

(2) 大学名
熊本学園大学

(3) 研究組織名
水俣学研究センター

(4) プロジェクト所在地
熊本市中央区大江２丁目５番１号

(5) 研究プロジェクト名
人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に活かす水俣学研究拠点の構築

(6) 研究観点
研究拠点を形成する研究

(7) 研究代表者名
花田昌宣（社会福祉学部・教授）

(8) プロジェクト参加研究者数
27　名

(9) 該当審査区分
人文・社会

(10) 研究プロジェクトに参加する主な研究者

班	タイトル	責任者
第一班	半世紀を経た水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究	花田昌宣
第二班	環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価：住民主体の実践的展開の可能性	宮北隆志
第三班	水俣学アーカイブス構築の試み：水俣学資料の収集・整理・公開と国際的発信	丸山定巳

(11) キーワード
①　水俣学　②　水俣病　③　公害　④　被害救済
⑤　地域戦略　⑥　健康影響評価　⑦　チッソ　⑧　資料保存

第二節　研究プロジェクトに参加する研究者リスト

【研究班１　学内】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
社会福祉学部・教授	花田昌宣	負の遺産としての水俣病の社会史と被害民の社会的存立構造	水俣病の地域的広がりと社会的被害の全容解明
社会福祉学部・教授	下地明友	水俣病をめぐる近代医療の意味：医療人類学的視点からの研究	臨床的医学研究を基礎に被害の持つ意味を明らかにする
水俣学研究センター・研究助手	田尻雅美	胎児性水俣病患者の生活と環境	胎児性水俣病が障害者として再定義されることにより社会的課題を明らかにする
水俣学研究センター・研究助手	井上ゆかり	水俣病被害による漁業と漁村の変容	水俣病被害がもたらした地域社会の生業（漁業）の変容を分析
社会福祉学部・教授	堀正嗣	障害学の新たな課題としての水俣病被害者の主体形成の研究	障害という観点から水俣病被害をとらえ返すことにより、新たな課題を提示する
商学部・教授	萩原修子	汚染地区住民の民俗誌的研究	水俣病被害の社会的意味を当事者の語りを通して精神世界から解き明かす
社会福祉学部・教授	中村俊也	汚染地域に見る福祉的ケアの社会的構築	水俣病被害者の福祉相談および地元でのケア研究会の組織化を通したニーズ把握と人材育成

【研究班１　学外】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
水俣学研究センター・客員研究員・顧問（平成24年6月逝去）	原田正純	胎児性・小児性水俣病の広がりの臨床研究	これまでの研究蓄積を基礎に胎児性水俣病の新たな課題を照射するとともに水俣学を構築する
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授（平成24年8月逝去）	足立明	アクターネットワーク論の方法に基づく水俣病被害50年史の持つ意味とアジアからの照射	被害解明と救済のための社会的基盤を人とモノの関わりから解明しその通用性を検証する
大阪市立大学・大学院経営学研究科・教授	除本理史	被害補償と救済制度の意味	さまざまな公害に登場する認定制度と補償・救済システムを検証し、水俣病政策の課題を解明する

【研究班２　学内】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
社会福祉学部・教授	宮北隆志	地域再構築モデルの提案と検証	ソーシャル・ガバナンスの仕組みづくりと人材育成
社会福祉学部教授（平成26年4月水俣学研究センター客員研究員）	小川全夫	高齢化・過疎化する汚染地域におけるコミュニティの課題の解明	地域間交流とプロダクティブ・エイジングの視点によるソーシャル・キャピタルの形成

社会福祉学部・教授	中地重晴	有害化学物質がもたらす住民不安とリスク評価の方法論的研究	地域におけるリスクコミュニケーションのあり方の検証
社会福祉学部・教授	守弘仁志	メディアコミュニケーションと地域情報システム	地域情報の視点によるソーシャル・キャピタルの調査・醸成
社会福祉学部・特任教授	山中進	汚染の広がりにかかる地域コミュニティの崩壊と存続	水俣・芦北の中山間地域における集落の維持と発展
社会福祉学部・教授	高林秀明	不知火海沿岸地域の生活問題と地域福祉政策・活動	ソーシャル・ガバナンスによる地域福祉運営モデル構築とその評価
社会福祉学部・講師	藤本延啓	地域社会における環境と社会のコアイッシューの検出と住民の対応	水俣・芦北地域再構築の実現に向けた実践行動と理論的考察

【研究班２　学外】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
産業医科大学・准教授	熊谷信二	有害化学物質に起因する健康被害の疫学的評価	公害被害並びに開発の地域生活への影響に関する疫学的評価
（有）国際水銀ラボ・所長	赤木洋勝	生態系における微量有害物質の評価	不知火海における微量水銀汚染の動向分析
熊本学園大学・非常勤講師	沢畑亨	中山間地域における社会基盤形成	水俣・芦北地区における地域活動の組織化と評価

【研究班３　学内】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
社会福祉学部・教授（平成25年4月水俣学研究センター客員研究員・顧問、平成26年12月逝去）	丸山定巳	資料集の刊行	水俣病資料の解読と水俣病事件資料集の刊行
社会福祉学部・教授	山本尚友	不知火海沿岸地域の近現代史資料にあらわれる水俣病事件	歴史資料整理の手法を近現代資料に活かすためのデータベース化の方法の開拓と実施
商学部・准教授	杉本学	水俣病研究史の意味論的分析	研究文献目録作成

【研究班３　学外】

所属・職	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	研究プロジェクトに果たす役割
水俣学研究センター客員研究員顧問	富樫貞夫	資料集の刊行	水俣病資料の解読と水俣病事件資料集の刊行
九州大学経済学研究院・教授	磯谷明徳	水俣病に見る公害と経済制度の文献史的研究	制度政策から見た戦後経済成長における水俣病事件史の分析
佐賀大学経済学部・教授	宮田義典	化学産業における労使関係史と水俣病事件	企業内労働分析と水俣病の発生・拡大・救済の分析
熊本日日新聞社・論説委員長	高峰武	第三水俣病事件の再検証	新聞資料から水俣病事件史を検証し年表の作成を行う

第二章　研究計画

第一節　研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトは、熊本県下におきた水俣病事件を地元の大学として研究する拠点形成の試みであり、「学際的研究」、「地元密着型の現地に学び地元に返す研究」、「水俣病の負の教訓を世界に発信する研究」という多面的な意味を含めて水俣学と呼んでいる。公害の原点としての水俣病事件は発生の公式確認以来半世紀以上を経過した現在においても、救済・補償問題をはじめ被害の全体像や地域の活性化などを踏まえるならば、解決を見ていないばかりか、残されている課題は大きい。また、カナダ先住民居留地や開発途上国等で水銀中毒事件が起きていることから見ても、水俣病被害とは何であるのか、その解決とは何なのかを改めて問い直し、その研究成果を世界に発信することが求められている。

1999（平成 11）年に原田正純氏が提唱した水俣学の構想は、徐々に実を結びつつあるが、いまなお緒に就いたばかりである。5年間の本研究プロジェクトを通して、国内外に発信する水俣学の研究基盤を、研究方法の革新、研究内容の進化、新たな研究人材の育成の面からも組織的に構築することが本研究の目的である。

研究代表者のもとに三つの班に分けて研究員を組織して調査研究を実施するとともに、水俣学独自の方法を持って大学院教育と連動した人材育成、国際的発信、社会貢献を進めて行く。それは各班の調査研究の遂行とともに、下記の年次計画に基づいて進める。

表１　年次計画

2010(平成22) 年度	キックオフ研究会開催と各班の調査ならびに研究着手。研究成果は研究センター紀要、毎年の水俣病事件研究交流集会ならびに学会等で発表される。人材育成の取り組みとRA・PDの募集開始。アジア現地調査。
2011 (平成23) 年度	調査研究の継続。大学院と連携した夏期若手研究セミナーの開始（以後毎年開催）。海外からの研究者を招いて研究会。
2012 (平成24) 年度	調査研究の継続。中間成果の報告シンポジウム（胎児性水俣病公式確認後50年）の開催
2013 (平成25) 年度	調査研究の継続。環境被害に関する国際フォーラムを国内外の住民や研究者を招聘して開催
2014 (平成26) 年度	調査研究の集約と成果報告書の取りまとめ。総括シンポジウムの開催。外部評価委員を含めた達成度評価の実施

第二節　研究組織

(1) 研究組織の概要と研究代表者の役割、責任体制及び参加人数

本研究プロジェクトは、「水俣学研究センター」を母体とし、そのもとで組織されており、研究代表者は、各班の統括、プロジェクトの進捗管理など研究マネジメントに責任を負う。

本研究プロジェクトでは、以下の三つの研究班を組織するが、これらは入れ子状に密接に協働しながら研究が進められている。第一班（責任者：花田昌宣、学内研究員７名、

学外研究員３名）は、「半世紀を経た水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究」として、水俣病被害とは何かの問い直しが行われ、その研究調査プロセスは第二班（責任者：宮北隆志、学内研究員７名、学外研究員３名）「環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価：住民主体の実践的展開の可能性」の研究へと反映されるとともに、第二班の成果は、第一班の水俣病問題の解決への指針を提供する。第三班（責任者：丸山定巳、学内研究員３名、学外研究員４名）「水俣学アーカイブス構築の試み：水俣学資料の収集・整理・公開と国際的発信」は、水俣学研究の資料的基盤を形成し、第一、第二班のベースを提供すると同時に、この二つの班の地域密着型研究調査過程で収集される資料を追加架蔵することで充実が図られる。また研究文献目録の解題作成には三つの班の全研究員が参与する。

(2) 大学院生・PD 及び RA の人数・活用状況

大学院では、水俣学フィールドワーク(不知火海沿岸臨地研修および国内外公害被害地臨地研修)を正規科目として実施しており、本研究プロジェクトと連携をした教育を実施しており、平均 10 名前後の大学院生が参加している。RA（リサーチアシスタント）等に関しては 2010（平成 22）年度１名採用したが、2011（平成 23）年度以降は適任者が得られなかったので現段階ではおくことができていない。この点は、本事業の中間評価において、地方私学の現状に照らして学外との連携等工夫の余地があると指摘されたところであるが、後にみる若手研究者セミナーの実施を通して改善を目指したところである。

(3) 研究チーム間の連携状況

各班の研究責任者を中心として毎週一回月曜日に運営委員会を持ち研究の進捗状況や問題点を把握し、効果的な運営と緊密な連携をはかっている。また、運営委員会での審議は議事録を残しており、常に点検できるようにしている。

プロジェクトの構成員は、研究会や調査を通して恒常的に連携するだけではなく、メーリングリストによって絶えず情報交換を行っている。さらに、大学内にもうけられたサーバー上のクラウドサービス（学内私書箱）を活用し、データや文書類を保存・共有できるようにしている。ただし、調査データや個人情報も含まれているため、現時点では利用は学内の主要な研究員および研究サポートメンバーに限定している。

(4) 研究支援体制

水俣学研究センターに研究助手２名が配置されるとともに、事務職員３名（本学キャンパスのセンター2 名、現地研究センター1 名）が配置されている。くわえて、アルバイト・研究協力者を本学および現地センターに必要に応じて配置している。

大学の事務組織としては学術文化課が担当事務部局であり、財政・経理・施設整備・研究評価など、学内諸部局組織との連携を図りつつ、支援体制を構築している。

(5) 学外研究機関などとの連携状況

本研究プロジェクトは、水俣学研究というオリジナルな方法と課題を有しているため、

恒常的な共同研究機関をおいていないが、下記のような機関や組織と密接に連携・協力している。

日本環境会議、国立水俣病総合研究センター、NPO 法人環境ネットワークくまもと、水俣市内では、NPO 法人水俣病協働センター、水俣病センター和思社、水俣病互助会、水俣病不知火患者会、水俣芦北公害研究サークル。なお、水俣市や天草市御所浦支所とは、日常的な協力関係を構築している。

国際的には、水俣学研究センターが学術研究交流協定を締結している海外の機関である国立成功大学社会科学院（台湾）、EARTH（タイ：環境問題の民間シンクタンク）、チュラロンコン大学のほかに、中国清華大学公共管理学院、カナダ・マニトバ大学先住民研究センター、韓国の NGO 環境運動連合などと連携してプロジェクトを進めている。

第三節　研究施設・設備など

本学の「水俣学研究センター」、並びに、水俣市に開設した「水俣学現地研究センター」を本プロジェクト推進のために活用している。

(1)「水俣学研究センター」

本プロジェクトの推進のために、本学 14 号館 3 階に事務室、文献資料室をおくとともに、7 号館 2 階に資料整理作業室ならびに書庫を設置している。資料の受け入れは、研究センター事務室で実施するが、保管は専用書庫でおこなう。研究会等は 14 号館 3 階の会議室で行なっている。

水俣学関連書籍、研究資料、DVD や CD 等の媒体は、文献資料室の書架に収蔵され、研究員、客員研究員や大学院生、調査に訪れる研究者らが活用できるようにしている。（書籍 2579 点）

表 2　水俣学研究センターの施設概要

事務室	33.2㎡	研究助手1名、事務職員2名、アルバイト7名を配置
文献資料室	33.2㎡	関係図書や資料を配架
資料作業室	40.0㎡	資料の受入、整理・登録等の作業
書庫	40.0㎡	水俣病研究会蒐集資料はじめ水俣学関連資料等を所蔵

(2)「水俣学現地研究センター」

現地における調査・研究活動の拠点として、2005（平成 17）年 8 月に水俣市浜町 2 丁目に開設された。2 階建てのビルに下記のようなスペースを配置している。

1 階には、事務室、相談スペースならびに研究スペース、書庫スペースがあり、広く学外者にも利用できるようにしている。健康・医療・福祉相談、研究会、セミナーなどは 2 階に設置された相談室・会議室で行う。2 階には研究コーナーもおいており、国内外の短期・長期滞在の研究者が利用できる。なお、新日窒労組旧蔵資料をはじめ、調査資料や書籍を配架、外部の研究者に公開している。（書籍 481 点）

インターネット環境については、水俣市域では SINET（学術情報ネットワーク）のノ

ードに直接接続できないため、本学キャンパス経由で接続している。また、現地研究センター内にLANを構築している。

表3　水俣学現地研究センターの施設概要

事務室	15.5㎡	研究助手1名、事務職員1名、アルバイト5名を配置
文献資料室	8.7㎡	資料を配架
資料閲覧室	30㎡	新日窒労組旧蔵資料を配架、ネガフィルムケース・自動書架設置
会議室1	50㎡	関係図書や資料を配架
貴重書庫	8㎡	新日窒労組旧蔵資料の非公開資料を保管
会議室2	26㎡	研究会など開催、研究室との間仕切りを解除しセミナー開催
研究室	26㎡	貴重図書を配架
相談室	25㎡	健康・医療・福祉相談の受け入れ

図1　水俣学現地研究センター施設

第三章　研究成果

第一節　研究課題の概要

2012（平成24）年6月11日に急逝された原田正純氏の提唱による水俣学が産声を上げたのは1999年であった。それ以来、競争的研究資金（科研費や財団系研究助成）および学内の支援を受けて、研究と教育の体制づくりがすすみ、2005（平成17）年には水俣学研究センターが設置された。2010（平成22）年から始まる本事業は、水俣学の理念と課題に基づいた研究活動を実施するとともに、水俣学という研究の学的基盤を構築することを課題としている。

第一に、水俣病被害とは何であるのか、その解決とは何なのかを改めて問い直し、また地域に根ざし、公害を経験した地域の再生戦略を地域のアクターとともに作り上げ、その研究成果を世界に発信することが目的である（42,43,44）。

第二に、水俣学の研究基盤の構築である（8,10,11,117,162）。それは、学としての形成であり、多様な水俣病の研究と評価機能を内包した住民参画型の地域戦略モデルの構築を内容とする。

第三に、研究組織の確立と持続性を得ることである。それは、学部および大学院教育と連動した研究組織の形成を通して、人材育成をはかることであり、さらに水俣学に係る資料等の整備および調査研究環境の構築とその活用という人的側面および物的側面から基盤形成をベースとする。

加えて第四に、公害を経験した地域の研究者や地域住民の日本国内および海外のネットワークを形成するとともに、その経験を生かして水俣病が発生した地域での研究と教育の基盤を構築することである（19,24,31）。

第二節　研究の成果の概要と内容

本研究基盤の形成に当たっては、三つの研究班にわけて行う研究事業とそれらを横断的に研究拠点として実施する事業との有機的連関のもとで実施され、所期の目標は達成している。本第二節において三つの班ごとにその研究の成果を示し、第三節において、研究事業の遂行を通して獲得された研究基盤形成としての目標と成果を示す。成果の内容の詳細については引用されている公表論文や報告書類を参照されたい。

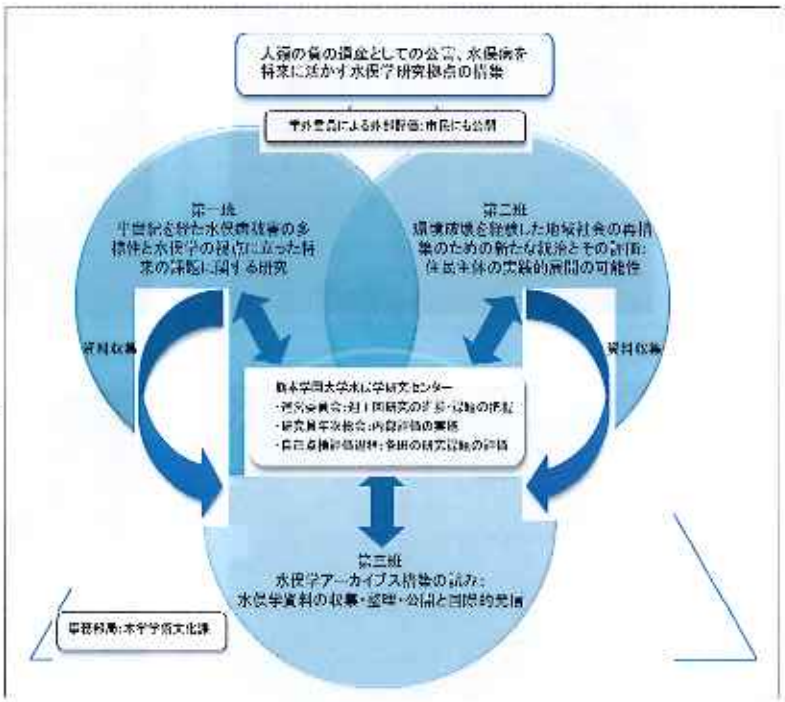


図2　3つの研究班と事業の有機的連関

(1) 第一班「水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究」

＜研究課題の概要＞

水俣病がもたらした個人の健康被害のみならず、生活そして地域社会の変容の解明に焦点を当て、病いを医学から解放し、社会的にとらえ直し、水俣病隠しが過去も現在も続いている地域の差別の実相と社会構造、さまざまな制度政策がもたらした影響、そして地域社会の深層において水俣病がもたらした変容を解き明かしていく。

＜研究成果の概要＞

●内容

胎児性・小児性水俣病の医学に関する、補償救済、福祉面からの総合的調査研究、従来顧みられなかった対岸離島での調査、特定の漁村の全戸調査に基づく健康被害及び生業と地域コミュニティに与えた影響と変容、被害の実態と補償救済制度、カナダ先住民居住地域に発生した水俣病調査とその結果の日本との比較検討というサブテーマを設け、文献調査をふまえて、地域に内在した現地調査を実施した。

●達成度

対岸離島の調査をのぞいて、当初の計画以上に進捗し、成果を発表することができている。水俣病という病の社会的な側面を、臨床医学、社会福祉学および社会学の連携に基づいて明らかにすることができた。また、歴史と現在の交錯という視点に立ち、海外のケーススタディをふまえて、水俣病に対する差別と偏見という今日的な問題の解明を行なうことができた。

＜研究成果の詳細＞

第一班は下記に示すサブテーマに従って調査研究を実施した。

(i) 胎児性水俣病の研究

重度化する胎児性水俣病患者家族に焦点を当てて調査を行った。明らかになったのは、複合家族のケアの課題であり、介護補償が既存の補償システムや社会福祉の制度では解決し得ていないことが明確になった。施設介護の拒否と在宅生活を進める上で、介護補償と社会的隔離の現状把握と提言をまとめている（15,22,24,85,136,140）。

また、重篤な胎児性水俣病患者と同世代で補償・救済システムの網の目にかからないケースの調査を実施した（24,79,85,129,136,137,139,140,142）。この成果の一部は日本公衆衛生学会総会において報告し、近く論文として公表される。

本プロジェクトで実施している健康・医療・福祉相談や地域調査を通して、明らかになったのは、精神科病院に入院しているなどの理由から、補償救済に関する情報が本人に知らされていなかったケース、比較的軽症で地域の差別を恐れて本人が公健法の認定申請や水俣病特措法の救済策といった水俣病救済システムを拒絶していたケース、症状面からみて現行の認定基準（いわゆる77年判断条件）を満たしていると見なされるにもかかわらず、地域の偏見差別や家族の事情など種々の理由から補償救済対象となっていないケースに類型化されることが解明された（138,142,143,144）。

今日の水俣病の健康被害の多様性の研究として若い世代の水俣病被害者（胎児性水俣病と同世代）の被害実態にアプローチした。とくに、高次脳機能障害を把握するべく臨床心

理テストと医学的臨床検査を組み合わせた手法を開発して、調査を行い成果の一部を発表できた。全身病としての水俣病が人格に与える影響を考察した（34）。

（ii）水俣病多発漁村調査

不知火海沿岸の漁村地区における水俣病と生業に関して、芦北町女島を対象地域として集中的調査を実施した。漁業形態ならびに生業の変容と被害の広がりについて社会学的な調査と故原田医師および下地医師を中心に医学的な健康調査を 2010-2011 年に行い、漁村における被害の全体像を描こうとつとめた。この集中的調査をふまえて、補足的調査を継続的に実施してきた（25,26,28,145,146,147,149,151）。

これらの健康調査結果と当センターに所蔵されている未公開資料群である熊本県衛生研究所が行った毛髪水銀データ（1960-1963 年の 2700 人分）、現在も収集中の臍帯水銀値データ（275 件）、認定患者リスト（2000 名余）、蓄積された検診カルテや医学資料とをクロスさせて分析を行なった。この結果をもとに家族集積、地域集積の観点から再集計するとともに行政的水俣病と被害実態について分析し考察を加えた（145）。この成果の一部は日本公衆衛生学会総会において報告し、近く論文として公表される（146,148,150）。

なお、当初計画していた対岸離島調査については、2010（平成 22）年大学院生を動員して現地（鹿児島県獅子島や熊本県天草市御所浦）での聞き取り調査を開始したが、＜問題点＞に記した事情（救済策や法制度の変更に伴う現地との関係構築の困難さの出来）によりいったん中断している。

（iii）カナダ先住民水俣病調査

原田正純医師のチームに続いて水俣学研究センターにおいて長期にわたり地元との信頼関係を構築し継続的な調査をしているカナダ先住民の水俣病に関しては、2010（平成 22）年現地調査実施、2012（平成 24）年現地およびトロントでの報告会の開催、2014（平成 26）年現地調査を実施した。2010（平成 22）年の調査は、医学的な調査を中心に実施し、2014（平成 26）年には、医学的な調査、環境中の水銀汚染調査（魚類）、社会学的調査を実施するとともに、カナダの水銀障害委員会の医師や法律家などとのカンファレンスを現地で行なった。これらを通して、カナダ・オンタリオ州イングリッシュ・ワビグーン水系の二つの先住民居留地に水俣病が発生していること、また汚染及び被害の把握、補償救済などにおいて民族差別問題が深く関わっていることが明確になった。調査の成果を医学面（4,16）及び社会的側面（12,13,14,27,80）に焦点を当てて発表した。また 2014（平成 26）年の調査に関しては結果の速報を公表した（116）。

このカナダ先住民の水俣病に関して、われわれ日本人チーム以外は現地にはいっての調査は行っておらず、国際的にも重要な意義を有している。

（iv）補償・救済の制度的研究

補償救済制度の比較研究については、患者団体の動きを追うとともに資料の収集に重点を置き、国内の資料はもとよりカナダにおける水俣病認定制度に関する内部資料を入手でき、報告してきた。2013（平成 25）年 4 月に水俣病の認定をめぐる最高裁判決、および

環境省の認定基準に関する新通知（2014年3月）など、法制度・政策上の新たな動きもあり丁寧に追跡している。なお、2014（平成26）年8月末、熊本県が予定より2年遅れて水俣病特措法の救済対象者数データを公表したので分析に入ったところである（1,38,39,40,83）。

日本及びカナダのいずれにおいても、水俣病を巡る種々の制度や訴訟の判例（認定基準、補償制度、救済システムなど）と社会的背景から浮かび上がってくるのは、公害事件の発生とそれに連なる出来事に翻弄される被害民の実相であり、被害修復の課題の大きさと深刻さであった。これらを被害総論の中に位置づけ直す作業を行っている（125）。（『水俣学研究』に投稿中）

（ｖ）研究成果の発信

本研究センターが主体となって開催している水俣病事件研究交流集会は、2011（平成23）年1月参加者151名、報告件数15本、2012（平成24）年1月参加者140名、報告件数15本、2013（平成25）年1月参加者数146人、報告件数15件、2014（平成26）年1月参加者数142人、報告件数16件、2015（平成27）年1月参加者数110人、報告件数13件であり、研究発表交流の場として実施でき、水俣病事件に関する希有な研究報告と討論の場を作り得ている。

また、本事業で人材育成を意図しつつ、力を入れた若手研究セミナーは、本学大学院と連携し、2011（平成23）年9月に全国の若手研究者や大学院生18名、2012（平成24）年には同じく17名、2014（平成26）年には同じく24名の参加を得て実施され、所期の目的を達成できた。

国際的な発信に関しては、詳細は国際発信の項（第三章第三節）を参照されたいが、2011（平成23）年、2013（平成25）年カナダ先住民水俣病被害者を招聘して、水俣、熊本、東京で報告会を開催し、カナダ水俣病の経験と日本における研究の交流を実施できた。また、タイ、中国、台湾の公害発生地域を訪問調査し、その都度、地元受け入れ機関の協力を得て、現地で研究会やシンポジウムを開催し、水俣の経験と我々の研究成果の発信につとめた。

(2) 第二班「環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価」

＜研究課題の概要＞

この班の研究課題は、歴史上類例のない公害「水俣病」によってもたらされた地域社会の変化（健康被害や社会的影響により余儀なくされた社会経済の変容）をこうむった水俣地域の地域再構築に向けた戦略を、ソーシャル・ガバナンスの枠組み構築、およびヘルス・インパクト・アセスメント、リスクコミュニケーションの実践と評価等の研究活動を総合して構想することにある。この「地域戦略」は、公害による被害を経験した国内地域のみならず、開発途上国をはじめとする世界各地の被害発生地でも共有・深化できるものとして創り上げられる。

＜研究成果の概要＞

●内容

この班の調査研究は、水俣・芦北地域の社会的アクターをパートナーとし、研究班自体が地域社会にコミット（参与）する方法をとりつつ、2010（平成22）年以降5年間で計23回の課題/地域戦略検討会を、水俣学現地研究センターにて開催、住民主体の自立的な地域再構築のあり方について議論し、水俣・芦北地域のこれからの50年を視野に入れた「地域戦略」を提案することができた。また同時に、水俣病特措法に基づく環境省主導の地域振興策の問題点についても明らかにし、「地域の知」を活かすためのリスクコミュニケーション、並びに、地域に根ざしたヘルス・インパクト・アセスメント（HIA）の必要性について、タイ・チュラロンコン大学の研究者や環境NGOとの協働作業を通じて明らかにし、地域のアクターと共有することができた。

●達成度

社会的な困難と長年向き合う水俣や海外諸地域のアクターや研究者とのネットワークが強化され、地域再構築のための「概念モデル」を提案する中で、地域の自立的発展に向けた視点・問題意識を共有する基盤は形成されつつあるが、多様なアクター・セクターによる社会的合意形成の有り方に関しては課題が残されている。

＜研究成果の詳細＞

水俣において水俣学研究センターが中心となり、市民、NPO、民間事業者、行政職員などを巻き込んだ「水俣・芦北地域戦略プラットフォーム」を形成し、地域の将来構想とその評価にかかる検討を実施し、さらに定期的に研究会を実施してきた（46,47,92,93,94,162, 163,164,173,174）。

その過程で、ソーシャル・ガバナンスの指標の検討やヘルス・インパクト・アセスメント（HIA）およびリスクコミュニケーションの手法の整理を実施してきた。本事業採択以降23回の課題検討会を開催してきたところである（162）。

その議論を踏まえて、水俣病の経験を生かすべくヘルス・インパクト・アセスメント（HIA）とリスクコミュニケーションの手法の活用が有効であるとの結論を得て、その有効性を検証するための国内外での活動を進めた（88,89,162）。2012年には、「健康影響評価（HIA）に関する国際セミナー：地域のエンパワメントと社会的合意の形成」をテーマとする国際シンポジウムを水俣学研究センターの主催で、熊本学園大学にて開催した。

また、海外での活動の一つが、タイの公害発生地域（東部臨海工業地帯）をフィールドとした現地調査であり、2010年、2011年、2012年、2013年、2014年、地元NGOとの共同調査ならびに現地マプタプット市での国際会議を開催できた（167,170,171,180）。これはタイ語の報告書が作成され地元に還元された。

2013（平成25）年3月には、チュラロンコン大学で、同大学、水俣学研究センターおよび環境NGOの共催でInternational Conference on Risk Communication and the Possibility Towards Constructive Solutions for a Healthy Future of MTPと題する国際会議を開催し、研究討議を行うことができた（156,166）。

また、水俣におけるわれわれの取り組みの概念的ツールおよび研究の方法と成果については、台湾（国立成功大学）、イギリス（マンチェスター大学）などでも報告討論された（172,174）。

これらの成果は、水俣及び不知火海沿岸での地域構想に還元され、水俣市独自の住民参加型の政策検討機関である円卓会議に反映されている。水俣における政策提言は「水俣市の廃棄物政策に関する5つの提言」としていったん出されたが、2012年水俣市における住民参加の円卓会議が「環境まちづくり研究会」として環境省及び外部コンサル業者主導の活動に再編された。第二班が形成してきた研究機関と多様なアクターとで形成している地域戦略プラットフォームと新たな円卓会議との連携のあり方について協議中である。これ自体が、自治体政策と地域づくりの諸条件に関わる研究課題として浮かび上がったところである（41,46,163,164,187,189）。

みなまた地域研究会が2012（平成24）年12月に発足し、水俣湾周辺の水銀汚染に関して、住民による生物調査や底質調査を実施するようになった。専門家として協力している。その中で、水俣市内の水銀による土壌汚染を調査し、水銀条約における汚染サイトの取り扱いに関して問題提起した。

(3) 第三班「水俣学アーカイブス構築の試み：水俣学資料の収集・整理・公開と国際的発信」

＜研究課題の概要＞

この班の研究の課題は、散逸しつつある水俣病にかかる体系的な資料を蒐集し、整理した上で広範な学問領域にわたる水俣病関係研究文献の網羅的なデータベース化を行い公害史・水俣病事件史をはじめとして今後の国内外の研究に寄与することである。さらに関連画像を中心に水俣学アーカイブスと題して、映像アーカイブスの構築をはかり、研究者のみならず教育関係をはじめとして広く社会に貢献することであった。研究組織は、本プロジェクト研究員を中心に構成されており、資料収集や整理、写真整理作業については現地関係者を準研究員としておいている。

＜研究成果の概要＞

●内容

データベースでは、水俣学研究センターのWEBサイト上に、新日窒労組旧蔵資料、宮澤信雄旧蔵資料、最首悟旧蔵資料、水俣病研究会蒐集資料、浜元二徳旧蔵資料の資料目録だけでなく、資料画像に人権上の配慮から個人情報に係る部分にマスキングをかけ公開することで広く研究の用に資するよう努めてきた。

平成24年には「映像でみる新日窒労組の歴史」を公開、平成26年には「水俣学アーカイブス」と題した動画や写真資料を視覚的に公開し、研究者以外への理解も容易になるよう工夫してきた。また、平成26年に水俣学研究センターのWEBサイトをリニューアルし、アクセスおよび閲覧が容易になるよう工夫するとともに、英語ページも改善し、国際的発信も補強した。

また、このような作業の過程の成果として、新日窒労組機関紙『さいれん』復刻版（全24巻、柏書房、2010-2012）やブックレット『水俣病と向き合った労働者の軌跡』（熊本日日新聞社、2013）も刊行した。さらに平成25年には『さいれん』復刻版刊行記念シンポジウムも開催し、働く者の記録と水俣病の意味を検討する場を設け広く情報発信も行ってきた。

●達成度

当初の予定より大幅にデータベースの資料群、資料点数の公開が進み、水俣学アーカイブスを公開したことで国際的情報発信のための基盤は形成できたと考える。しかし、他の水俣病資料を扱う研究機関との連携、HP英語版の充実を図る必要がある。

＜研究成果の詳細＞

（i）「水俣学研究センター所蔵資料データベース」の拡充・発展

本事業期間中、公開した資料は下記の通りである。資料は本センターにおいて積極的な蒐集努力を重ねており、地元を中心として信頼関係を構築して来ているため、継続的に資料が寄贈されている。資料の受け入れ、登録作業は本センターにおいて定めた手順に従って行なっている。データの解読および入力作業は、研究員の指示のもと、水俣現地および本学において、アルバイトを雇用して進めているところである。なお、公開に当たって、各資料群の資料画像でプライバシーに関わる部分には、研究上の観点から判断し、当センターで設けたマスキング基準に則りマスキングをかけた。

国際的情報発信のため、データベースの英語版ページリソースを現在作成中であり 2015 年 7 月に公開予定である。

外部評価委員からは高い評価を受けたものの、「資料を収蔵する連携に基づく資料の有効利用が望ましい」との指摘を受けた。水俣病資料を扱う関係機関との連携が今後の課題となった。

（水俣学研究センター所蔵資料データベース http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/database）

表 4　公開資料群一覧

資料名	資料内容	公開した点数
新日本チッソ労働組合旧蔵資料	水俣病の原因企業であるチッソ株式会社の労働組合である新日本窒素労働組合は、会社と対立する形で水俣病患者の支援運動に乗り出した組合の資料である。 平成24年から写真資料と物品資料を追加し公開、さらに「映像でみる新日窒労組の歴史」を公開した。2014（平成26）年には水俣学アーカイブスの水俣今昔コンテンツに本写真資料を100点選出し使用した。	文献目録 6224点 （細目録 14872点） （記事目録22361点） 写真目録 8595点 写真画像 8595点 物品目録 536点 物品画像 542点
水俣病研究会蒐集資料	水俣病研究会蒐集資料はチッソに対する訴訟で原告弁護団を支援する目的で結成され訴えの論拠と裏付けを提示するために一次資料の蒐集を行った研究会の資料群。2013（平成25）年から公開した。	文献目録 461点 資料画像 461点
宮澤信雄旧蔵資料	宮澤信雄旧蔵資料は元NHKアナウンサーで水俣病告発する会、水俣病研究会のメンバーとして水俣病事件史研究を行った方の資料群である。2013（平成25）年から公開。	文献目録 962点
最首悟旧蔵資料	最首悟旧蔵資料は第一次不知火海総合学術調査団の第二次調査団長をつとめた方の資料群である。2013（平成25）年から公開した。	文献目録 319点
浜元二徳旧蔵資料	浜元二徳旧蔵資料は、水俣市の漁師で水俣病認定患者、補償協定を川本輝夫氏らとともに引き出した方の資料群である。2015（平成27）年1月から公開した。	文献目録 153点 資料画像 17点
松本勉旧蔵資料	松本勉旧蔵資料は、元水俣市職員で水俣病市民会議事務局長をつとめた方の資料群である。2015（平成27）年2月公開を目標に資料整理を行ってきたが、書籍、資料、写真、物品資料が膨大であったため、書籍目録1741点の公開は2015（平成27）年6月を予定している。	書籍目録 1741点

（ii）「水俣学アーカイブス」の構築・公開

2014（平成 26）年 12 月、データベース構築および映像資料蒐集・制作の過程を通して、水俣学の取り組みの一端を研究者以外への理解が容易になるようデジタルアーカイブスとして、視覚的に公開した（71,72,199,206）。コンテンツは下記の表の通りだが、水俣学

データベースが、文字・テキストベースで研究資源として重要な意義を有しているのに比して、水俣学アーカイブスは、水俣学研究調査の過程で獲得し得た画像・動画を中心に制作し、社会に広く成果を公表するとともに、国内外の専門家・非専門家に容易にアプローチできるものとして構想されている。

（水俣学アーカイブス　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/marchives）

表5　水俣学アーカイブスコンテンツ一覧

コンテンツ	タイトル	公開内容
証言	患者証言	上村好男氏、松崎忠男氏、緒方博文氏の3名の証言映像を公開した。
	共に聞く	コンテンツのみ作成し内容は未公開。
歴史	水俣今昔	新日窒労組旧蔵資料の写真日録から45点を公開した。同地点で新たに撮影した写真45点を江戸・明治・現在の地図にマッピングした。地図は本学所蔵の資料を使用した。
	時空でたどる新日窒労組	新日窒労組旧蔵資料の写真日録から67点を公開した。同地点で新たに撮影した写真67点を江戸・明治・現在の地図にマッピングした。地図は本学所蔵の資料を使用した。
	水俣略年表	明治7年から現在までの水俣病を中心とした水俣地域略年表を公開した。
自然	海辺の物語	水俣の生物を生物学者の監修で生物日録を作成し生物写真とともに15点を公開。
教育	伝える 子どもたちへ	コンテンツのみ作成し内容は未公開。
	現場をさるく	福祉環境学科の水俣現地研修の教育プログラム1点を動画で公開した。
	学校の現場から	地元教員が作成した学習材、資料を1点公開した。
記録	新日窒労組8mmグループ	「映像でみる新日窒労組の歴史」とリンクさせ公開した。
未来	失敗の教訓を活かす	2015（平成27）年7月公開予定。

なお、患者証言映像は、編集前に本人または遺族と「映像使用承諾書」を取り交わし、映像編集後に再度本人または遺族に映像を確認してもらい承諾を得たうえで（必要時再編集する）公開するという手順を踏み倫理上の配慮を行っている。

アーカイブスの英語版ページリソースも現在作成中であり、証言映像は英語字幕で表記する作業に時間がかかっているため英語版は2015（平成27）年9月に公開予定である。

外部評価委員からは、高い評価を受けたものの、歴史の証人が存在しない危機的状況を視野に入れた取り組みを継続して行う必要があり、今後さらにコンテンツを充実させていくものである。

（iii）情報発信に向けた他の取り組み

資料蒐集及びデータベース構築事業に関連して、労組機関紙『さいれん』復刻版（全24巻、柏書房、2010-2013）、ブックレット『水俣病と向きあった労働者の軌跡』（熊本日日新聞社、2013）を刊行した（105）。あわせて、2013（平成25）6月には、さいれん復刻版刊行記念シンポジウムを270名の参加で実施し報告書も刊行した（106）。

さらに、2011（平成23）年から現在にかけてチッソ労働運動史研究会の研究員が元新日窒労組組合員のヒアリング調査を14回開催し、花田、磯谷、富田らが第128回社会政策学会春季大会で報告した（198,203,205）。この報告内容は、『大原社会問題研究所雑誌』に掲載された（70,72,73,74）。

地域連携として、水俣学現地研究センター（水俣市）において、水俣学に関連する資料展示を開催してきた。2013（平成 25）年には「原田正純追悼展−水俣学への軌跡」と題し、原田正純氏が所蔵していたノート、カルテ、調査記録などを一般公開した。

また本事業の遂行過程で、第一班および第二班の調査研究にともない行政資料を初めとする関連資料が収集・蓄積されている。これらは、調査研究に利用しているものであるが、順次目録化をはかる。

図 3　水俣学アーカイブスのポスターとホームページの画像

第三節　研究基盤形成としての目標と成果

(1) 研究基盤の形成

原田正純氏の提唱により水俣学研究が開始されて 10 年以上経過し、本研究事業を通して、資料や設備の整備および上記の各班の研究調査の進展により水俣学研究拠点が学術的世界のみならず社会的にも認知、定着していると判断している。

水俣学現地研究センターの利用も年々増加しており、JICA などの国際研修の受け入れのみならず、各地の研究機関からの研究拠点活用依頼が増えてきた。水俣学資料の閲覧と利用、現地調査への協力依頼（近年だけでも福島大学うつくしま未来支援センター、新潟大学水俣病講座、埼玉大学を中心とした公害教育科研をはじめとした研究プロジェクトなど）も増えている。さらに地元の研究団体との共同研究（水俣芦北公害研究サークル、みなまた地域研究会など）も進んでおり、地元での市民に開かれた研究拠点としても意味を持っている。

これは研究拠点が単に箱だけではなく、本研究事業が水俣市内での現地客員研究員や被害者患者たち、地元自治体や NGO グループとの日常的信頼関係に基づいた研究資源としてのネットワークを地元に構築していることによるものである。これら地の利、人の利を活かした研究拠点としての基盤が形成されていると認識している。

(2) 人材の育成

熊本学園大学社会福祉学部における一年次及び二年次の水俣合宿フィールドワークプログラム、三年次の水俣学講義やそれを支える水俣学教育活性化プログラム、大学院修士課程における不知火海沿岸フィールドワークおよび国内外の公害被害発生地フィールドワーク（京浜・千葉、福島、タイ、台湾）という、学部から大学院にいたる一貫した教育体系を構築し人材養成プログラムをもうけている。博士後期課程では、現在 2 名が水俣学をテーマに学位論文を準備中である。

また、本学だけではなく、全国の大学や研究機関に公募して、若手研究セミナーを開催し、水俣病を始め公害・環境問題を教育・研究する各地の大学院生や若手研究者に水俣学の成果を共有する試みを実施している。その中から我々の研究調査活動に参加する者も出始め徐々に成果が現れているものと判断している。

(3) 社会貢献

水俣市内に拠点をおく水俣学現地研究センターにおいて、医師や看護師資格を有する研究員を中心として水俣病の不安を持つ住民向けに、医学的検診や生活上の相談、種々の手続などに関する健康・医療・福祉相談を定期的に実施し、住民のニーズに応えるよう努力している。この相談事業には本事業実施中 641 の相談件数があり、それに関しては学会で報告してきた（143,144）。

水俣市内で研究センターの持つ教育研究資源を活用して、地域住民向けの公開講座を毎年実施し、高等教育機関をもたない水俣・芦北地域からも期待されている。

水俣芦北地域には環境問題に関する様々の市民運動や NPO が存在し協力関係にあるが、そうした中から地域の環境問題を市民自らで調査しようという研究会（みなまた地域研究

会）が 2012（平成 24）年 12 月に立ち上がり、本研究センターの研究員や客員研究員も参加して、海辺の生物調査や環境汚染実態調査を開始した。2015（平成 27）年 1 月に水俣市内の水銀による高濃度の土壌汚染を発見し、問題提起した。本研究センターとしても、場所の提供のみならず、研究資源や人材の面で協働関係を築いており市民科学の生成を支援している。

（4）国際的発信と連携

（i）国際発信と環境被害に関する国際フォーラム

水俣学の根本理念の一つとして、開発途上国を中心にいまなお続いている環境汚染と公害の発生という課題にたいして、水俣病の経験を世界に伝える国際的発信と地元との連携を進めていくという点を掲げている。そのために、国際フォーラム、海外からの招聘・受け入れ、海外調査を実施してきた。また、われわれとしては、国際的発信に関しては、WEB サイトでの情報の公開に取り組むだけではなく、現地における共同の調査研究やその成果を持ち寄った国際会議を通して、発信できるものと考えた。

2013（平成 25）年 9 月、熊本市内及び水俣市で第 2 回環境被害に関する国際フォーラム(Minamata Disease "Applying the Lessons Learned from the Minamata Disease and its Mistakes to the Future")を開催できた。これには、従来より研究交流のあったカナダ（水俣病発生被害地）、タイ（東部公害発生地域）、中国（河南省淮河流域公害発生地域）、台湾（台南市水銀及びダイオキシン公害発生地域）、韓国（亀尾市フッ素酸流出事故など）から、研究者と公害発生地域の住民や NGO を招聘して、各国からの報告を受けるとともに、日本の水俣病の経験を共有することを目的としていた。

各国からの研究発表、現地報告を受けるとともに、日本からも水俣、新潟、福島からの研究報告を行い、情報共有と討論を行い、全国から 438 名の参加を得た。（報告書印刷中）

（ii） カナダ水俣病被害と連携

カナダ・オンタリオ州で発生した水俣病に関しては、原田医師を中心に現地調査が行われてきたが、2010（平成 22）年、2012（平成 24）年、2014（平成 26）年と 3 度にわたり現地調査をおこない、また現地での成果報告会やオンタリオ州都トロントでの報告会を行った。外部から入りにくく、さらにカナダの地元の医学者や研究者が現地に入っていない状況下で、地元先住民組織との信頼関係を丁寧に築き、カナダで水俣病が発生していること、さらに日本での経験が生かされていれば被害が最小に押さえられたであろうことを明らかにするとともに、カナダ水俣病の発生の背景事情についても解明してきた。また、2011（平成 23）年、先住民らを日本に招聘して、水俣、熊本、東京などでシンポや講演会を開き、情報の発信につとめた（80）。

（iii） タイにおける公害

本研究事業の開始より、タイ東部臨海工業地帯マプタプット工業団地において発生した深刻な大気汚染や水汚染等による公害事件に関して、チュラロンコン大学や環境 NGO(EARTH)と連携し、現地調査やタイでのシンポジウムやリスクコミュニケーション

会議等の開催を重ねるとともに、2012（平成 24）年には、日本へ研究者ならびに住民を招聘し、「健康影響評価（HIA）に関する国際セミナー：地域のエンパワメントと社会的合意の形成」をテーマとする国際シンポを水俣学研究センターの主催で熊本学園大学にて開催した。2014（平成 26）年 11 月には、「アジアの災害と紛争の現場から：市民参加と協働による創造的復興」をメインテーマとする API 市民フォーラム・広島において、EARTH のペンチョム氏、水俣病・被害市民の会の山下善寛氏（水俣学研究センター客員研究員）と共にパネル発表「水俣とタイのマプタプット工業団地における産業汚染の経験に基づく交流と協力」に参加・報告。また、2014（平成 26）年 12 月には、第 8 回タイ・日本研究学会において、"Japan's Decades of Social Conflict and Community Governance"というテーマで講演し、討論に参加した。

東北タイ・ルーイ県において金鉱山開発に伴う水銀をはじめとする重金属汚染と健康被害が発生しており現地から調査協力要請があり、4 度にわたり現地調査を実施し、健康調査、毛髪の採取と分析、住民からのヒアリングなどを行ない環境被害の状況を確認することができた。またこの問題に関する学術セミナーを、EARTH、チュラロンコン大学平和と紛争研究センターとの共催で開催し、討論に参加した。

このように日本とタイにおける経験と今後に向けた課題の共有に努めた（49,50,160）。

(iv) 台湾における水銀・ダイオキシン公害と日本企業

台湾においては、台南市において鐘淵曹達（のちの台湾苛性会社）安順工場によるクロロアルカリ工程から水銀やダイオキシンによる公害が発生しており、2006（平成 18）年の国際フォーラムおよび 2013（平成 25）年に開催した国際フォーラムにおいて、現地の研究者および住民から報告を受けていた。また、地元の国立成功大学とも研究協力協定を結んでいる。現地調査、研究発表会などを通して研究交流を積み重ねていたが、2014（平成 26）年 7 月には、大学院修士課程のフィールドワークをかねて、台南市の安順工場跡地周辺を訪問し、工場跡地の修復事業の企業担当者および被害住民の聞き取り調査を実施するとともに、国立成功大学、台南社区大学の研究者などとの意見交換会を実現できた。2014（平成 26）年度の調査に関しては報告書を印刷し関係者に配布した。

(v) 中国の環境汚染

中国における環境汚染と公害被害の発生が深刻なことは知られている通りであり、水俣学研究センターも設立以来、淮河の水質汚染に関して地元関係者との連携関係を保って来た。2011（平成 23）年 11 月には、中国清華大学公共管理学院による水俣現地調査チーム（地域環境ガバナンスの経験と教訓の研究：日本の水俣市の公害事件と地域再生の試みを例に）11 名を受け入れた。清華大学から、資料の中国語訳、共同研究、国際会議の開催などの提案があり、水俣学研究センターとしても連携して進めることとし、2013（平成 25）年、熊本学園大学で開催した環境被害に関する国際フォーラムに招聘し研究報告を受けた。2013（平成 25）年 11 月清華大学からの招聘に基づいて、清華大学チームと河南省淮河水系の水質汚染とその対策に関する現地訪問調査を行うとともに、北京で開催されたセミナーで研究報告を行った。

今後もこれらの連携関係を活かして、国際研究交流と発信を継続していく。

（vi）　その他

2013（平成 25）年 10 月に熊本市および水俣市で国際水銀条約締結のための国際会議が開催されたが、水俣学研究プロジェクトも会議への参加、サイドイベントでの報告、パネル展示を海外からの参加者を対象に行なった。その過程で海外との連携が新たにできつつある。たとえば、多数の小規模金鉱山を抱えるインドネシアの地元の NGO からの招聘に基づき、2015（平成 27）年 3 月に水銀条約に関するワークショップに参加し、水俣病の教訓について報告するとともに、小規模金採掘における水銀使用による環境汚染と人体被害の課題について意見交換した（175）。この問題は今後も継続し、調査に取り組む予定である。

このようにして従来のわれわれの取り組みが国際的にも認知され始めており、国際的なネットワークが形成されつつある。

第四章　評価と展望

第一節　優れた成果が上がった点

本事業の様々の中で優れた成果があがった点として認識されるものとして次の三つをあげておく。

(1) 地元密着型の研究方法の有効性を示し得たこと

本研究事業においては、研究方法の革新として「現地に学び現地に返す（現地密着型の調査研究と現地へのフィードバック）」「専門家と素人の協働（学的知のオープンな共有と協働）」「学問分野の壁を越える（学際的研究の実践）」「国境を越える（国際的な発信と連携）」を掲げている。これらはいずれも数値化した成果評価が困難であることは承知した上で、その中でも現地密着型の研究方法は大きな成果を上げたと考えている。

それは、原田正純氏が開拓した方法であり、被害の原点に立ち、水俣病をめぐる様々なアクターの利害関係、政策的展開や状況の変化に拘泥することなく、水俣病被害者の暮らしに内在し信頼関係を構築し得ていることは長期的なスパンで水俣学を構築する上での枢要点である。地域の知を学問的に表現し、還元するものである。この水俣学の方法はまた海外調査においても必要であると同時に有効であることが明らかになったと考える（7,10,75,117,118）。

(2) 環境被害に関する国際フォーラムの成功と水俣学の国際的展開の基礎の形成

国際的発信の項に記載したので詳述は避けるが、国際フォーラムの開催と成功は大きな成果であった。現地との協力関係に基づく現地調査や各国の研究者らの日本への招聘を通して、水俣病の経験の発信ならびに日本へのフィードバックが可能になった。水俣病に関しては、2013（平成 25）年の国際水銀条約締約国会議など日本への注目が高いが、水俣病の経験に関する国際的な期待に応えることができていないという認識に立ち、積極的な調査研究の国際的展開と情報の共有をはかった。予算や研究資源の制約上、東南アジアおよび北米と未だ限定的ではあるが、単に論文の公刊など以上に、実質的な国際発信ができたと評価している（41,179,200,201）。

(3) 水俣学関連資料の収集と公開事業の進展

本事業の予算及びデータベース科研を活用しながら、受入、整理、目録の公開さらにアーカイブスの構築へと計画調書に従って進めてきているが、質的にも量的にも当初の計画を越えて進捗した。そのことは本研究センターが水俣病関連の研究拠点として認知され、資料が寄せられ続けているとともに、文献目録を公開するだけでなく画像や動画映像も公開することで社会的なインパクトを供し、資料閲覧者数も 12 万人を超えたことにあらわれている。既収集の資料以外に地元住民や患者を始め関係者からの貴重な資料の寄贈が増加してきている。これは本事業の優れた成果であるとともに今後の展開に期待されている点であろうと認識している（206）。

第二節　問題点

(1) 若手研究人材の育成について

中間評価時に指摘を受けたRAおよびPDをはじめとする若手研究人材の育成に関しては「地方の私立大学の問題点として若手研究者を得にくいことがある。研究拠点という意味では、PD、RAだけでなく他地域の大学院生なども巻き込む組織戦略もあり得るかとおもう」との助言をいただいた。とはいえ、RAおよびPDを得難いという点は、水俣学というオリジナルな学問的営為（アカデミックキャリアコースに乗りにくい）であること、および地方私学における研究者人材育成という2つの側面を有した課題であると認識している。大学院修士課程に「福祉環境学専攻」、博士後期課程に「環境福祉学領域」をおき、水俣学を活かした研究者への道を準備し、また若手研究セミナーを開催するなどの取り組みもしてきたところである。今後、大学理事会と協議しながら、大学の壁を越えた取り組みを模索していくこととなる。

(2) 研究テーマの拡張について

2011（平成23）年の3.11東日本大震災と原発事故は、私たちの研究と無縁ではなかった。水俣の経験を生かすことが社会的責務であると判断し、同年5月には急遽、研究会を実施するとともに現地訪問調査を実施した。震災と原発事故そのものは研究構想段階では計画されておらず、研究テーマに直接組み入れた訳ではないが、この出来事が水俣学の有効性にいかにつながるのか、福島の現場の経験とつなげながら検討し、福島からの協力依頼を積極的に受け入れることとし、また調査協力も行った（なおそれについては副次的効果の項目に記載した）(3,7,78)。

(3) 制度政策の変化と研究計画上の困難

2010（平成22）年に成立した水俣病特措法とそれによる国の政策実施は、現地にコミットする研究機関の調査活動にも影響を与えた。第一班では離島調査をパイロット調査のみで延期した。これは当該対象地域が水俣病特措法の救済策実施により混乱し協力が得られにくくなったことに起因する。これについては、長年調査を実施してきた芦北や水俣の漁村地域での調査研究に集中し、事態の沈静化を待つこととした。

第二班におけるプラットフォーム活動の再編も余儀なくされつつある。従来より自治体が設置した市民参加の円卓会議システムが、国による膨大な資金投下（環境省主導の環境まちづくり研究会とその報告に基づく予算配分）と介入によって自治機能を失いつつあると判断せざるを得ない状況が現れてきている。2013（平成25）年7月より、この変化に対応する点検活動（定例的な研究会）を行っているところであるが、この変容自体もまた研究対象となるところである（42,187）。

第三節　評価体制

(1) 費用対効果と資源配分のルール

水俣学の特徴として、成果の地域への還元（現地に学び地元に返す）を掲げており、研究機関として閉じこもるのではなく、現場の人々や機関とともに調査研究が実施できてい

るか、そしてその成果がどのように社会貢献につながっているか、加えて新たな学の創造を企図している以上、それに成功しているのかどうか、というところが、効果の分析の鍵になる。これは研究組織内での検討では十分ではないので、大学における内部評価、そして学外の専門家に委嘱した外部評価によって実施される。

成果と資源配分に関しては、水俣学の形成の性格上、特許や論文数という数値化指標の設定だけでは（それを軽視する訳ではないが）困難が生じるので、調査研究実施プロセスの「透明性と討議（合議）」が大切であると判断している。従って、日常的なプロジェクトの運営の会議、議事録の作成と関係者（研究メンバーならびに大学の関係部署）への公表、定期的なフィードバックに組織として取り組むことと定めている。

加えて、成果や研究の実施過程についは水俣学研究センターの WEB サイトで日常的に発信し社会に公表するとともに、『水俣学通信』や水俣学ブックレットを継続的に刊行しており、社会への還元は果たしているものと判断している。

(2) 自己評価とその体制

毎週月曜日に開催される水俣学研究センター運営委員会において、研究調査の進捗状況が報告検討されている。また毎年 6 月には、研究員年次総会を開催し、内部評価を受ける仕組みができている。構想調書の達成目標が実現できるように、水俣学研究センターとして自己点検評価規程を設け、水俣学研究センター長のもとで、各班の責任者が、自己評価を行い到達の程度を点検する仕組みを作っている。また、学内規程で定められた自己点検・自己評価の実施の規定に基づき、内部評価を受けるべく学内の調整を行なった。それは熊本学園大学が 2015（平成 27）年度に実施する大学基準協会の認証評価の対象となっている。水俣学研究センターとしての自己点検評価は、大学の報告書に記載したところである。

(3) 外部評価委員会の設置

本研究構想に着手する直前、2009（平成 21）年に、大学基準協会による大学機関別認証評価を受け、水俣学研究センターは、「市民、研究者、自治体などさまざまなレベルで地域や国際社会に貢献しているので高く評価できる」とされた。とはいえ、本研究事業としては、独自に学外に委員を委嘱し評価委員会を設置、外部評価を受けた。

委員には、炭谷茂氏（元環境事務次官）、寺西俊一氏（一橋大学教授、日本環境会議理事長）らの専門研究者の他、水俣市の吉井正澄氏（元水俣市長）が就任し、2014（平成 26）年 12 月 14 日に、委員のヒアリングを受けるとともに市民にも公開された成果報告シンポジウムを開催し、外部の評価を受けた。

第四節　外部評価委員による評価

以下に2014（平成26）年12月14日に開催された「水俣学の10年－戦略的研究基盤形成支援事業成果報告」シンポジウムにおいて、外部評価委員から示された本研究事業に関する評価の発言を収録する。（このシンポジウムの評価委員の発言に対するリプライやフロアからの市民らからの発言は、資料編201ページに収録した。）

【炭谷　茂氏：元環境事務次官・恩賜財団済生会理事長】

（水俣学研究センターの3人から）これまでの10年間にわたる研究成果を話していただきました。まずこの10年間の歩みを聞いて、この水俣学研究センターがあって本当によかったなあという感じを持っております。逆にこの水俣学研究センターがなければ、日本にとってまた日本の環境問題だけではなくて、日本の社会にとって大きな損失になったのではないかというふうに感じました。たいへん地道な研究成果で、これは日本の財産の大きなバトンといいますか、遺伝子継承につながっているという総体的な印象を持ったわけでございます。したがって注文というものはあまりないわけでございますけれども、これからはぜひこういう面にも力を入れていただけたらいいなという点を何点かお話しさせていただきたいと思います。

図4　炭谷茂氏

まず第一点は、山本尚友先生の話（第三班：資料の収集と公開、水俣学アーカイブス構築）を聞いて、すごいことをやっていらっしゃるんだと思いました。これは時間との競争だと思います。時間がかかればかかるほど貴重な資料がなくなっていく。関係者もいなくなって検証もなかなかできなくなってくるという怖れもあります。ぜひできるだけ早くまとめていただき保存・整理していただく、そして社会に提供していく。これは非常に重要ではないかなと思ったわけでございます。

それから、特に水俣病に対する関心として、水俣病の被害者や患者に対する偏見や差別というものがずっとあったわけでございます。これがどういう状態だったか、なぜ起こったのか。宮北先生は国・中央と地方との対立構造ということでも考えられましたし、吉井元市長の話の中では市民の間での対立というものもありました。これを本当の実証的な形で追究を深めていただくと、ありがたいなと思ったわけでございます。

次に、このような貴重なものを、ぜひこれを活用していく、応用していく、実用化していく。すでになされていると承知いたしましたけれども、これを二つの面で、一つは実際の水俣病の被害者の方々また水俣病の患者の方々のこれからの生活や人生のために活かしていくということが重要でして、一方でそれ全体を含めた地域再生ということが期待されているのではないかと思います。もう十分なされていると承知してはおりますが、提言という形をさらに自ら水俣学研究センターが行動を起

こす。これからはやはり行政がやるだけではなくて、市民のレベルで手を取り合ってと、こういう社会ではないかなと思います。これは新しい市民社会、宮北先生の言葉では「新しい民主主義」ということだろうと思います。住民のレベルで、この水俣学研究センターが中核になって組織づくり、事業づくりを行って行動を起こしていく、というようなことも期待されていると思っております。

そして三つ目には、まず水俣市でそういうモデルをつくっていただいて、それをまた他の地域や国にも広げていく。それができる潜在的な大きな能力が水俣学研究センターにはあるのではないかと思っております。すでにタイ・中国・カナダ等でなされておりますけれども、より具体的に、こういうふうな国づくり、こういうふうな町づくり、またこういうふうな被害者に対する対応を具体的に示していくということが期待できると思っております。

最後は人材の育成です。新しい町づくりをやる、被害者の支援を行う。そのような人材づくりを、学生また市民のレベルでやっていただくと、たいへん新しい展開が期待されるし、また日本のためにもたいへんよいことではないかなと思っております。私自身が教えられることばかり多くて、以上気がついたことを述べさせていただきました。

【寺西俊一氏：一橋大学大学院経済学研究科教授・日本環境会議理事長】

図5　寺西俊一氏

これからの水俣学研究センターに私が期待したいこと、ということで三点申し上げます。

一点目は「原田先生の足跡と遺志の継承と発展」ということで、将来の人材育成を含めてですが、これはこの10年かなりなされているのではないかと思いました。継続的に息切れせずにやってこられた。引き続きやっていただければというのが、報告書を読ませていただいた感想です。おそらくメンバーの方々、まだ原田先生が本当にお元気な頃から一緒に中心になって全体のリーダーとして、原田先生との個人的なつながりもあったのだろうと思います。現在中核になっているセンターの方々、それに協力している私のところの卒業生たちも、とても原田先生の影響を受けて、ここに協力したいということでやっているので、第一の期待はもう、このままこれを伸ばしてもらえれば十分だと思っています。

第三に挙げた「ネットワーク」、これは私の表現で言えば、「国内外の公害・環境被害者（福島原発事故被災者を含む）の支援、交流・連帯を通じた幅広い研究者・市民の連携ネットワークづくり」、この拠点になっていただきたいという期待です。これも、こんなにやったら大変じゃないかと思うくらい、タイ・カナダ・中国と、ものすごくよくやっておられるなという印象です。

私自身は原田先生のアドバイスを受けて、『アジア環境白書』づくりということを

1990年代初めから20年やってきました。『アジア環境白書』、英語版も出して、そして一部は中国語・韓国語でも出しました。いくつか問い合わせがあり、出版権等の問い合わせも来ていたけれども、我々も何とか20年やってきたけれども、率直に言って息切れしてしまっています。それでかなり研究者ベースですが、日本の国内でこの白書づくりに関わった150名から200名くらいの研究者、こういうことに関心を持ち専門分野はそれぞれだけれども、いろいろな人たちに緩やかに連携してもらって「アジア環境白書プロジェクト・ネットワーク」を私がつくってきました。メーリングリストもかなりありますが、21年目以降からはなかなか、頭打ちというか一区切りになっています。これはもったいないと思っていまして、私自身がちょっと息切れしてできなくなった分、できたらそのネットワークと、水俣学研究センターのネットワークづくりとをクロスさせてほしいというのはあります。ここの研究員のメンバー構成をみると、人的にリンクしていない感じがあります。私がたまたま接点を持ったところではクロスしているとは思いますが、少し意識的・戦略的にそういう既存のネットワークや別のグループのネットワークとの連携で、相互に奥行きと幅を広げていく。そしてここがまさに対外的な公害環境研究における水俣の現実を踏まえたユニークな独自なセンター的な役割を果たすものとしてもう一段、発展してもらえると嬉しいなあというのが三番目に書いたことの中身なんです。

二番目の「水俣病被害の全貌の解明、そこからの教訓を踏まえた『水俣地域再生』のための政策研究」。先ほどの炭谷先生の話の中での、環境・福祉を統合して環境福祉都市を目指す。あるいは水俣が21世紀的な国家構想としても環境福祉国家、20世紀的な福祉国家が環境問題を引き起こしてきてしまった反省を踏まえての、これからの新しい国の形やあり方。そういうことで言うと、やはり水俣が発信すべきキーワードは「環境と福祉」というこの二つだと思うんです。宮北先生から「地域再構築のモデル」提起ということで、次の地域再生プランの、水俣からどういう新しい地域づくりのビジョンと再生の戦略を示せるかということで丁寧な説明がありました。その中に健康プロモーションというプロジェクトが入っていました。

だから私はこれからの水俣地域のあるべき将来をキーワード的に考えてみました。水俣病の健康被害は現在も続いていて、しかも世代間にわたって胎児性水俣病という形で一番健康被害を象徴的に受けた地域として、まず第一に挙げるキーワードは「健康」だと思います。だから「健康都市」、医学関係の取り組みもずいぶんあるようだし、健康プロモーションの国際的な潮流もあるので、水俣の水俣的発信のキーワードとして「健康」をまず入れていただく。その健康のベースに地域福祉システムがないといけない。すると「健康・福祉」、その一番ベースのところにエコロジカルな水俣の固有の地域の生態系、環境的な豊かさ自身を回復していかないと、そこに住む人たちの最終的エコロジカルな関係から言えば保障できない。という意味で私は「Ecological Well-being Communication」を再生していく、日本における、世界における最初のモデルになっていくようなプロジェクトに発展してほしいということで、特に宮北さんのところに強く期待したいということです。

第二班のチームメンバーのリストを拝見させていただいて、このスタッフで十

分そういうことにチャレンジしていける人的体制も今は揃っているように思います。もうちょっと注文をつけるとすれば、今地域づくりの問題は政府でさえというと変ですが、増田レポートを先ほど出されたように、あんな衝撃的な消滅都市みたいなことは、わざとショック療法的にああいうものを出して、地域創生本部をつくって、しかし出てくる施策は完全に逆方向を行っていると私は思います。あれを打ち出すことによって、「お前たちの所は手を差し伸べてもどうせ死滅するんだから俺たちはもう援助しないよ」と言っている。その後、今年7月まさに軌を一にして出てきた国土交通省のプラン、あれは「国土の細胞としての小さな拠点」ということで全国5000ヶ所程度に集約してしまうということを言っているわけです。そうなるとたぶん水俣などは集約されて、熊本あるいは博多を中心とした、あのプランが想定している「概ね 30 万人以上の都市圏」の中に組み込まれてしまう。そことの接点で効率的に選択と集中で地域再建をやるということですから、これは田中角栄が出てきた時の列島改造論の 21 世紀版のような中身なんです。

宮北先生の資料の中に「水俣の地域社会の変容」ということで図がありました。チッソ進出前の水俣の地域コミュニティはこうだった。チッソが出てきてこれだけの大きな水俣病被害が出て、地域社会がズタズタになってきた。これを克服して再生していく次の水俣の地域再生ビジョンとして、そのあたりを少し対抗的に説得力のある、全国的に応援をしたくなるような、そういうビジョンをぜひ出してもらいたいということなんです。

ぜひその時に、限界集落問題が 90 年代に出てきて、今農業が岐路に立たされているTPP 問題も含めてありますので、今そういうことに関わり始めている研究グループや、私なんかもその 1 グループなんですが、そういうところの知見とここのチームとがリンクしていただく。そういう意味では私もあまり知恵はないけどある程度の協力、ネットワークをつないでいく結び目の一人くらいにはなれるかと思うので、特に第 1 班の地域再構築プランのところには、ものすごく期待をしております。以上です。

【吉井正澄氏：元水俣市長】

私は先ほどの講演で、具体的な問題についても触れさせていただきましたので、今度は少し大きく、基本的な問題についてお伺いをしたいと思います。

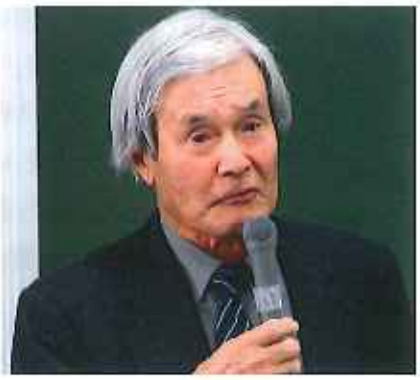


図 6　吉井正澄氏

水俣に大学をつくろうという動きは大学院大学という方向にあるようですけれども、市民の中にはあまり期待がない、話題にのぼらないという状況があります。なぜかと申しますと、市民の望む大学誘致というのは、学問の向上・人材育成とかいう本来の目標ではなくして、地域経済の発展であるからです。人口の減少に歯止めをかける具体的な方策として考えているんです

ね。そうすると大学院大学というのは、あまり期待に沿わないということになってしまいます。熊本学園大学の水俣学研究センターの設置は、地元に根ざした学問、そして地元に還元する研究という目標を掲げておられます。これはまさに市民の要望と、ほぼ一致するものです。それから大学をつくるという時、他の大学の経緯を挙げてみますと、研究所があったり、大学の施設があったり、それがだんだん大きくなって大学に成長していく。そうしますと、学園大学の研究所はセンターが水俣にあって、これは経緯としてはほぼ一致する。ところがなかなかそうはならない。これは大学の方針なのか、今日は学長もおいでなのでお聞きしたいんですよ。センターをもっとだんだん大きくして学園大の分校にする、そういったお考えはないのか、それが一点目であります。

もし地元に問題があるとすればどういうことなのか。私は市役所の職員に聞いてみました。そうしたら「学園大は水俣病専門の大学ですもんね」という答えが返ってきました。たしかに研究センターは水俣病の問題に一所懸命取り組んでおられる。しかし最終的に目指すところは、人間の犯した愚かな行為を検証し、持続可能な豊かな人間性のある社会をつくっていこうということであると思うんです。水俣で言うならば、水俣病被害を徹底的に究明し、その成果を活かして、経済的にも文化的にも満足度の高い、安心・安全な水俣をつくる。そして個人的にも質の高い生活ができる水俣をつくろうというのが、最終的な目標ではないかと思うわけなんです。その説明とか説得とか宣伝などが、すごく欠けているのではないか。「水俣病の大学」と市の職員が言うように。そのあたりは一つの課題ではないかと思います。

それから先ほどから両先生が言われている、特に炭谷先生が提案されました「環境・福祉のコンパクト・シティ」、この概念を実現させてもらいたいというのは、寺西先生もおっしゃった通りであると思います。私は「水俣の再生の方向は環境と健康と福祉を大切にする水俣だ。これが水俣の将来像だ」ということを提案して、環境と福祉づくりを進めたわけですが、しかし残念ながら力不足で実現したとはいえない状態であります。福祉の問題をどう取り組んでいかれるのか。水俣病が発生したから環境が破壊され、そして健康被害者が続出し、弱者がたくさん出たわけです。やはり、元は水俣病ですから、水俣病の研究の中で福祉の問題というのはすごく重要なわけです。健康被害者や弱者をどうするかという研究がないとどうにもならない。そういう点でも、もう少し頑張っていただきたいなという思いがいたします。

それからアーカイブス構築の問題でございますけれども、これは先ほども申しましたように、すごく難しい問題です。研究すればするほど囲い込みが非常に強い。今一番たくさんの資料を蓄えているのは国立水俣病総合研究センターではないかと思います。こことの連携がないと資料の有効利用はあり得ないのではないかと思います。

第五節　研究期間終了後の展望

本研究プロジェクトとしては、研究事業を継続する必要があると判断しており、水俣学研究センターにおいて、今後も進めていく。その理由と課題は下記の通りである。

（i）終わらない水俣病

水俣病を取り巻く様々な課題がまだまだ未解決であることが第一にあげられる。この点、水俣病の問題は、住民サイドからも政策的にも補償と救済に目を向けられがちであるが、そればかりではなく被害の全容解明、被害民の生活の再建など課題は多く、それには、学際的研究、現場主義、成果を現地に返す水俣学という学のあり方がユニークであり、必要とされていると判断する。

（ii）人材・現地拠点、研究者ネットワーク形成

水俣病にかかる地域の課題のシンクタンクとしての役割が、地域住民、被害民やNGOや自治体からも期待されており、そのための基盤形成（人材・現地拠点、国内の研究者ネットワークの形成）を計り強化していく必要があると判断している。

（iii）継続した資料収集・整理・公開

資料の収集・整理・公開が一定程度進捗し資料センター拠点としての機能を構築したが、なお継続的に資料が寄せられており、収集・整理・公開は継続する必要があることを痛感している。この背景には、資料収集や整理を行ううえで関係者の信頼と協力がなければ効果的な情報公開に至らないが、そうした信頼と期待を受けていることがあげられる。加えて、その関係者（水俣病患者や水俣病に関わった住民ら資料の所有者たち）も高齢となっていることを鑑みれば、散逸する資料の収集は集中的に行う必要があろう。

（iv）国際的研究ネットワークの形成

公害問題は国内では補償と救済の課題が焦点化されているが、海外に目を向ければ開発途上国を中心になお公害・環境破壊とその被害は発生し続けている。水銀に関しては、水銀条約の締結により、使用削減の強化や水銀汚染サイトの管理と浄化という新たな課題も出てきた。水俣学研究センターはこの5年間の活動を通してネットワークを築きつつあるが、水俣病の経験の負の教訓を共有し発信するための国際的な拠点として活動が求められているものと判断している。水銀被害に関する国際的な共同研究調査も必要とされてきている。

第六節　研究成果の副次的効果

(i) 3.11東日本大震災および福島原発事故に関連して、地元自治体や研究機関さらにはメディアから水俣病の経験を踏まえた「教訓」を活かすことが求められ、福島大学うつくしま未来支援センターや福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト・福島乳幼児妊産婦支援プロジェクト（群馬大学、宇都宮大学等）との連携が開始され、また双葉町から依頼された健康調査にも加わった（58）。このようにして、水俣学研究の成果を東日本大震災お

よび福島原発事故の現在進行中の課題の克服に役立つよう発信できた（15,56,124,130）。

（ii）刊行物やHPを通して発信した結果、アメリカ、アフリカ諸国、東南アジア諸国など海外からの研究者などが訪れ、あらたな研究交流が生まれた。特に中国については、清華大学公共管理学院調査団（地域環境ガバナンスの経験と教訓の研究―日本の水俣市の公害事件と地域再生の試みを例に）の受け入れ、北京での水俣学シンポが開催された。それとともに中国での水俣学ブックレットをはじめとする刊行物の中国語翻訳が開始された（121）。

（iii）構想調書作成段階では予定されていなかった国際水銀条約締約国会議が水俣で開催され、パネル参加を求められ国際発信を行うとともに、海外の研究者やNGOと連携したサイドイベントでの報告、それらを通した水俣における水銀汚染サイトの調査と解決を求められた。インドネシアのNGOからワークショップへの招待講演の依頼や水銀汚染に関する共同調査の申し出など水銀条約の内容を実質化する取り組みへの対応を要請されるようになった（52,53,171,175,176）。

第五章　研究発表の状況

＜雑誌論文＞

研究班１　半生記を経た水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究						
No.	著者名	論文標題	雑誌名、巻号	ページ	発行年	査読
1	花田昌宣	日本で被害が拡大する社会経済的要因 ― 水俣病の経験から	水俣学研究、6	11-30	2015	
2	花田昌宣	福祉就労を超える社会的企業の可能性	社会運動、412	48-54	2014	
3	花田昌宣	いのちをつなぐ、東北、熊本：3.11 以降の福祉と環境を考える（2012 年 6 月福祉環境学フォーラム記録）	社会関係研究、19(2)	87-91	2014	
4	Takaoka,S., Fujino, T., Hotta, N., Ueda, K., Hanada, M., Tajiri, M., Inoue, Y.	Signs and symptoms of methylmercury contamination in a First Nations community in Northwestern Ontario, Canada	Science of the Total Environment, 468-469	960-967	2014	有
5	花田昌宣	水俣病は終わらない	KUMAMOTO, 6	123-127	2014	
6	花田昌宣	水俣病の教訓の内実を問う：国際水銀条約と水俣病最高裁判決	社会運動、401	22-25	2013	
7	花田昌宣	公害の原点、水俣病と福島：水俣学の視点から	震災学、2	60-76	2013	
8	花田昌宣	水俣学の現在と課題	保健師ジャーナル、68	1098-1102	2012	
9	花田昌宣	3・11 と 5・1：原田先生と水俣学	環、51	62-64	2012	
10	花田昌宣	水俣学の創成と原田先生の最後の仕事	環境と公害、43(2)	9-13	2012	
11	花田昌宣	56 年を経た水俣病：水俣学の新たな取り組み	シーダー、7	69-73	2012	
12	花田昌宣、井上ゆかり	カナダ先住民の水俣病と受難の社会史（第 3 回）	社会運動、385	36-40	2012	
13	花田昌宣、井上ゆかり	カナダ先住民の水俣病と受難の社会史（第 2 回）	社会運動、383	41-45	2012	
14	花田昌宣、井上ゆかり	カナダ先住民の水俣病と受難の社会史（第 1 回）	社会運動、382	19-24	2012	
15	花田昌宣	水俣病被害史と原発事故 ― 水俣、福島、そして障害者	福祉労働、132	154-162	2011	
16	原田正純・花田昌宣・出尻雅美・井上ゆかり、堀田宣之、藤野糾、高岡滋、上田啓司	カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染 ― カナダ水俣病の 35 年間	水俣学研究、3	3-30	2011	有
17	宮北隆志	水俣病認定義務付け 4.16 最高裁判決の意義と課題 ― 申請から棄却まで 21 年間の放置を断罪	労働の科学、68	418-420	2013	
18	下地明友	文化精神医学と風土・民族・宗教：リスク・文化・語り／位相論的視点から	最新精神医学、18(6)	571-578	2013	
19	下地明友	ソーシャル・サファリング（Social suffering）：熊本県と社会精神医学の系譜 ― 「構造の裂け目」と「存在の現れ」― 覚醒剤中毒、CO 中毒、水俣病、カネミ	日本社会精神医学会雑誌、22(3)	266-273	2013	

		油症、優性遺伝子中毒そして・・・「終わっていない」				
20	下地明友	原田正純の軌跡と近代化の交差	熊本、58	71-73	2013	
21	下地明友	原田正純　その多様な世界	KUMAMOTO、創刊号	174-178	2012	
22	下地明友	戦争・境界の軌跡・臨床の詩学 ― 障害学と医療人類学との遭遇	こころと文化、10	143-150	2011	
23	下地明友	レジリアンス・病・文化 ― レジリアンスの医療人類学	こころと文化、10	112-119	2011	
24	田尻雅美	終わらない水俣病：第一号患者のケースから	保健師ジャーナル、68(10)	912-916	2012	
25	井上ゆかり	現場と理論の往還道 ― 水俣学の試み	現代思想、43(4)	162-170	2015	
26	井上ゆかり	生活現実としての水俣病被害	保健師ジャーナル、68(9)	818 822	2012	
27	井上ゆかり	カナダ先住民族が抱える3つの受難 ―「環境と生活破壊に抗するカナダ先住民族の現在」シンポジウムを終えて	IMADR-JC、168	10-11	2011	
28	井上ゆかり	海に生きる人々と水俣病	平成22年度神戸大学文学部ESD報告書	10-16	2011	
29	萩原修子	生み落とされることば、手渡されていくことば：水俣病事件と「本願の会」	宗教研究、373	203-230	2012	
30	萩原修子	善き物語と悪しき物語	熊々論々、1	58-65	2011	
31	原田正純	水俣病事件史から学ぶ	保健師ジャーナル、68(7)	630-635	2012	
32	原田正純	水俣病から現代社会を考える：水俣学と三・一一福島	ヒューマンライツ、290	2-9	2012	
33	原田正純、浦崎貞子、舘池近江、田尻雅美、井上ゆかり、堀山宜之、藤野糾、鶴田和仁、頭藤貴志、廣原寿和	カネミ油症被害者の現状、40年目の健康調査	社会関係研究、16	1-53	2011	有
34	佐藤忠司、原田正純	水俣湾岸地域に居住していて出生前後に有機水銀曝露を受けたと推定される人たちの46～67年後の人格像	新潟青陵大学大学院臨床心理学研究、4	5-10	2010	有
35	足立　明	モノをめぐる水俣病事件の社会史	水俣学通信、24	7	2011	
36	除本理史	戦後日本の公害問題と福島原発事故	経済学研究、63	231-241	2014	
37	除本理史	熊本水俣病事件の現段階 ― チッソ分社化に着目して	環境経済・政策研究、6	108-112	2013	
38	除本理史	チッソの分社化とは何か：歴史的背景から問題点と課題を考える（特集　水俣は今）	地理、57(2)	39-45	2012	
39	除本理史	水俣病特別措置法と環境・福祉対策の課題 ― 水俣市および水俣・芦北地域の再生・振興の観点から	東京経大学会誌経済学、269	165-192	2011	有
40	除本理史	水俣病補償・救済のゆくえ ― 特別措置法の問題点と課題を中心に（特集　公害被害救済をめぐる最新動向）	環境と公害、40(2)	59-63	2010	有
研究班２　環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価						

41	Miyakita, T.	Japan's Deades of Social Conflict and Community Governance: Minamata and Ashikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and "Minamata Studies"	Journal of Japanese Studies Association of Thaiand, 5 (1)	1-13	2015	
42	宮北隆志	社会的困難に長年向き合う地域における「生活の質」と多様な主体による「地域運営」	水俣学研究、6	31-47	2015	
43	宮北隆志	水俣病事件と"社会的合意の形成"	流れを変える、5	5-6	2014	
44	宮北隆志	持続可能な農的暮らしと健康な地域社会の実現をめざして ・・ 地球固有の資源を活かしたエネルギー自治	月刊社会教育、700、58-2	28-34	2014	
45	宮北隆志	脱水銀社会の実現に向けて ～ 採択された水銀条約の成果と課題	流れを変える 環境市民マガジン、3	18-19	2014	
46	宮北隆志	社会的困難に長年向き合う地域における「生活の質」と多様な主体による「地域運営」 ～ 公式確認から57年目を迎えた水俣病事件と水俣・芦北地域の再構築	社会医学研究、特別号 2013 第54回日本社会医学会総会講演集	42-43	2013	
47	Miyakita, T.	Minamata and Ashikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and Collaboration and "Minamata Studies"	水俣学研究、5	137-149	2014	有
48	宮北隆志	水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした市民参画・協働の場づくりと「水俣学」	保健師ジャーナル、68	1004-1009	2012	
49	宮北隆志	水俣の国際化 タイにおける近代化／工業化の進展と公害問題	月刊地理、57	65-72	2012	
50	宮北隆志、中地重晴、花山昌宣、丸山定巳、藤本雅彦、田尻雅美、井上ゆかり、吉村千恵、土井利幸	マブタプット工業団地の拡張をめぐる諸問題の現状と課題	水俣学研究、3	83-103	2011	
51	Miyakita, T.	Realizing Sustainable Minamata and Ashikita Region and Minamata Studies	Proceeding of International Conference for Environmental Governance, Tainan, Taiwan	1-7	2011	
52	中地重晴	水銀条約の意義と早期批准に受けた日本の課題	労働の科学、69 (5)	32-35	2014	
53	中地重晴	水銀条約と日本の課題	環境と公害、43 (4)	54-61	2014	
54	中地重晴	中国の微粒粒子状物質による大気汚染と日本への影響 OM2.5問題をから騒ぎに終わらせないために	労働の科学、68 (5)	26-29	2013	
55	中地重晴	住民参加による産廃不法投棄からの原状回復 香川県豊島の経験	技術倫理研究、10	51-68	2013	
56	中地重晴	水俣病などの水銀汚染にかかる歴史とあるべき今後の社会的取組み	環境技術、42 (10)	590-597	2013	
57	中地重晴	水銀に関する水俣条約と日本の課題	月刊保団連、1142	44-49	2013	
58	中地重晴	水俣学の視点からみた福島原発事故・環境汚染	大原社会問題研究所雑誌、661	1-19	2013	

59	中地重晴、藤本延啓	インドネシアの廃棄物処理の現状と課題	海外事情研究、40	107-121	2013	
60	中地重晴	マングラブット工業団地と住民の共存は可能か	JOINT、11	12-13	2012	
61	中地重晴	産廃特措法の期限まであと2年をむかえた豊島の産廃無害化処理(11)	環境監視、137	1-8	2011	
62	山中 進	地域論のすすめ	地域研究、54-1・2	4-15	2014	
63	藤本延啓	徳島県上勝町における廃棄物政策の歴史と「34分別」の背景	第23回廃棄物資源循環学会研究発表会論文集	57	2012	
64	藤本延啓	中国南京市における廃棄物処理事情:法制度の整理と現地調査から	海外事情研究、39(1)	155-164	2011	
65	熊谷信二	リスクアセスメント・マネジメントと三管理(特集 化学物質管理が変わる — コントロール・バンディング)	労働の科学、66(5)	279-283	2011	有
66	Matsuyama, A., Eguchi, T., Sonoda, I., Tada, A., Yano, S., Tai, A., Marumoto, K., Tomiyasu, T., Akagi, H.	Mercury speciation in the water of Minamata Bay, Japan	Water, Air and Soil Pollution,218	399-412	2011	有
67	Sakamoto, M., K.Murata, K. Tsuruta, K. Miyamoto, H. Akagi	Retrospective study on temporal and regional variations of methylmercury concentrations in preserved umbilical cords collected from inhabitants of the Minamata area, Japan	Ecotoxicology and Environmental Safety,73	1144-1149	2010	有
68	Voegborlo, R. B., Matsuyama, A., Adimado A.A., Akagi, H.	Determination of methylmercury in marine and freshwater fish in Ghana using a combined technique of dithizone extraction and gas-liquid chromatography with electron capture detection	Food Chemistry, 124	1244-1248	2010	有
69	沢畑 亨	まちづくり むらづくり ボランティアとの楽しい時間 — 世論形成のための森づくり	AFCフォーラム、59(7)	31-33	2010	
研究班3 水俣学アーカイブス構築の試み						
70	花田昌宣	新日本窒素における工職身分撤廃過程と労使関係	大原社会問題研究所雑誌、676	1-18	2015	
71	花田昌宣	水俣学関連資料管理・活用の現状と課題	大原社会問題研究所雑誌、673	10-16	2014	
72	花田昌宣	新日本窒素における労働組合運動の生成と工職身分制撤廃要求 — 組合旧蔵資料の公開に寄せて	大原社会問題研究所雑誌、630	1-13	2011	
73	磯谷明徳	戦後日本の化学工業の変容、チッソと労働組合	大原社会問題研究所雑誌、675	16-34	2015	
74	富田義典	戦後労使関係史における安賃闘争の位置	大原社会問題研究所雑誌、675	2-15	2015	
75	高峰 武	「原田正純」を読み返す	水俣学研究、5	127-136	2014	
76	高峰 武	水俣病最高裁判決をどう読むか:軌道修正の絶好のチャンスだ	新聞研究、744	62-65	2013	

77	高峰 武	一人の医師が存在したという教い	週刊金曜日、21(5)	36-39	2013	

＜図書＞

No.	著者名	図書名	出版社名	ページ数	発行年
研究班１　半生記を経た水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究					
78	花田昌宣・中地重晴(編著)	いのちをつなぐ ～水俣、福島、東北～(『水俣学ブックレット 13』)	熊本日日新聞社	全 112 頁	2015
79	花田昌宣	水俣病の現在と課題(『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	5-18	2013
80	花田昌宣、井上郁加	カナダ先住民の水俣病と受難の社会史(『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	97-126	2013
81	花田昌宣	水俣病の現在と水俣学の課題：私的覚書き(『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	127-139	2013
82	花田昌宣	水俣学と原田先生の最後の仕事(『原田正純追悼集　この道を一　水俣から』)	熊本日日新聞社	418-428	2012
83	花田昌宣、原田正純(編著)	水俣学講義　第５集	日本評論社	全 332 頁	2012
84	下地明友	「ほどほど」とは何なのか、いのちをつなぐ ― 今私たにもできることは(水俣学ブックレット 13　『いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～』)	熊本日日新聞社	38-42	2015
85	田尻雅美	忘却される患者 ― 第一号患者は、今・・・(『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	57-70	2013
86	除本理史・大島堅一・上園昌武	環境の政治経済学	ミネルヴァ書房	全 288 頁	2010
研究班２　環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価					
87	宮北隆志	中央」と「地方/地域」 差別と犠牲のシステム・国策に翻弄される地域(三池 CO 研究会編『福島・三池・水俣から「専門家」の責任を問う』)	弦書房	114-120	2014
88	宮北隆志(監訳)	人と鉱山 ルーイの未来	熊本学園大学水俣学研究センター	全 13 頁	2014
89	宮北隆志(監訳)	活性化するタイの地域健康影響評価CHIA	熊本学園大学水俣学研究センター	全 14 頁	2013
90	Miyakita, T.	Minamata disease and revitalization(Ed. by R. Cox and A. Caryle, Risky engagements: encounters between science and art)	Univ. of Manchester	20-21	2013
91	宮北隆志	高齢者の社会参加と耳のバリアフリー・プロジェクト ～「生活」に根ざしたヘルスプロモーションの実践(福本久美子・星元二編「蘇陽風とくらしと健康 ― わたしたちのヘルスプロモーション実践報告」)	熊本日日新聞社	132-150	2013
92	宮北隆志	プラットフォームを核とした市民参画・協働の取り組みと「水俣学」(熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	71-84	2013
93	宮北隆志	水俣・芦北地域戦略プラットフォーム(花田昌宣・原田正純編著『水俣学講義　第５集』)	日本評論社	235-268	2012
94	宮北隆志	失敗の教訓を活かす～持続可能な水俣・芦北地域の再構築(水俣学ブックレット8)	熊本日日新聞社	全 86 頁	2010

95	中地重晴	水銀ゼロをめざす世界(水俣学ブックレット 11)	熊本日日新聞社	全 78 頁	2013
96	中地重晴	水銀規制国際条約と水俣学(熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣学ブックレット9 水俣からのレイトレッスン』)	熊本日日新聞社	85-96	2013
97	中地重晴	放射能汚染とつきあう社会の到来(今福龍太・鵜飼哲編『津波の後の第一詩』)	岩波書店	90-108	2012
98	山中 進	地域資源を活かした産業づくりとパブリシティ:熊本県芦北町(服部銈二郎編『現代日本の地域研究』)	古今書院	15-31	2011
99	藤本延彦	大規模不法投棄問題と地方自治体(古川彰編、『新通史 日本の科学技術 第 4 巻:世紀転換期の社会史 1955 年~2011 年』)	原書房	561-573	2011
研究班３ 水俣学アーカイブス構築の試み					
100	花田昌宣	チッソの逃走を許さない(さいれん復刻版 第 6 回配本解説)	柏書房	1-14	2013
101	花田昌宣	会社の存続・強化を訴えて(さいれん復刻版 第 5 回配本解説)	柏書房	1-10	2012
102	花田昌宣	労働者が行動を起こす時おのずから道はひらける(さいれん復刻版 第 4 回配本解説)	柏書房	1-8	2012
103	花田昌宣	水俣を掃るがした一八七日間(さいれん復刻版 第 2 回配本解説)	柏書房	1-15	2011
104	花田昌宣	チッソにおける労使関係の特質と新日窒労組(さいれん復刻版 第 1 回配本解説)	柏書房	1-9	2010
105	花田昌宣、井上ゆかり、山本尚友	水俣病と向き合った労働者の軌跡(水俣学ブックレット 10)	熊本日日新聞社	全 166 頁	2013
106	井上ゆかり(編著)	さいれん復刻版刊行記念シンポジウム報告書	熊本学園大学水俣学研究センター	全 48 頁	2014
107	井上ゆかり	一人ひとりの生き方が問われた六年間 — 合理化闘争から水俣病への目覚め(さいれん復刻版 第 3 回配本解説)	柏書房	1-30	2011
108	山本尚友	さいれん復刻版 第 6 回配本 書誌解題	柏書房	15-17	2013
109	山本尚友	さいれん復刻版 第 5 回配本 書誌解題	柏書房	11-12	2012
110	山本尚友	さいれん復刻版 第 4 回配本 書誌解題	柏書房	18-19	2012
111	山本尚友	さいれん復刻版 第 3 回配本 書誌解題	柏書房	31-32	2011
112	山本尚友	さいれん復刻版 第 2 回配本 書誌解題	柏書房	16-19	2011
113	山本尚友	さいれん復刻版 第 1 回配本 書誌解題	柏書房	10-13	2010
114	宝樂貞夫	犯罪としての水俣病(花田昌宣・原田正純編著、『水俣学講義 第 5 集』)	日本評論社	173-194	2012
115	高峰 武(編著)	水俣病小史(増補版)(水俣学ブックレット 6)	熊本日日新聞社	全 150 頁	2012

＜学会発表＞

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
研究班１ 半生記を経た水俣病被害の多様性と水俣学の視点に立った将来の課題に関する研究					

116	花田昌宣	カナダ先住民における水俣病調査結果報告(第一報)	第10回水俣病事件研究交流集会	新潟市	2015年1月
117	花田昌宣	被害の現場に身を置くということ、水俣学構築の経験から	日本教育学会大会	福岡市	2014年8月
118	花田昌宣	水俣学の課題と展望:水俣病事件の多様な側面	福島大学うつくしま未来支援センター「東日本大震災を契機とした震災復興学の確立」研究会	福島市	2014年7月
119	花田昌宣	水俣病最高裁判決が拓いた水俣病事件史の新たな地平	第9回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2014年1月
120	花田昌宣	原田先生の足跡:水俣学への軌跡	大阪人権博物館シンポジウム「水俣病と向き合った医師達」	大阪市	2013年11月
121	花田昌宣	産業開発と公害被害:水俣病事件を鏡として	中国清華大学公共管理学院国際シンポジウム	北京市	2013年11月
122	花田昌宣	水俣病の経験と福島の被害:水俣学からの問題提起	社会思想史学会全国大会	八王子市	2013年10月
123	花田昌宣	水俣病の歴史と現状	水俣から水銀条約を問う国際シンポジウム	水俣市	2013年10月
124	花田昌宣	水俣病に解決はあるか:水俣病をめぐる現状と課題	第30回天草環境会議	天草都苓北町	2013年7月
125	花田昌宣	水俣病認定義務づけ訴訟最高裁判決に寄せて	日弁連水俣病シンポジウム	東京	2013年6月
126	花田昌宣	公害の原点、水俣病と水俣学	福岡県自治体研究所研究会	福岡市	2013年4月
127	花田昌宣	日本で被害が拡大する社会経済的要因 ― 水俣病の経験から	京都大学経済学研究科シンポジウム「水俣病、アスベスト、胆管がん問題の社会経済的要因」	京都市	2013年3月
128	花田昌宣	水俣学のめざすもの:学的方法の革新	公教育計画学学会(招待講演)	熊本市	2013年3月
129	花田昌宣	胎児性水俣病患者と水俣学の課題	シンポジウム胎児性水俣病が問いかける:公式認定50年後の今日から	熊本市	2013年2月
130	Hanada,M	Experience from the Minamata disease in Japan and Canada:What are the lessons ?,	カナダ先住民の水俣病報告講演会	トロント市(カナダ)	2012年6月
131	花田昌宣	水俣学のとびら:水俣病と福島原発事故	日本地域福祉学会(年次大会基調講演)	熊本市	2012年6月
132	花田昌宣	今日の経済危機の中でのソーシャルエコノミーの課題:日本における社会的企業の可能性	関西ベンチャー学会	大阪市	2012年3月
133	花田昌宣	選択可能な代替案としての社会的経済	2011年度日韓社会的企業セミナー	ソウル市(韓国)	2011年11月
134	花田昌宣	水俣病の負の教訓と東日本大震災・福島原発事故	第28回天草環境会議	天草都苓北町	2011年7月
135	下地明友	実践的レジリアンス・ナラティヴ論・関連史	多文化間精神医学会	東京	2011年10月
136	田尻雅美	障害者の視点から見る胎児性水俣病	筑紫女学園大学人権講演会	太宰府市	2014年7月

137	田尻雅美	小児性水俣病患者の介護の実態	第 9 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2014 年 1 月
138	田尻雅美、井上ゆかり	水俣病患者の補償・救済施策の利用実態と医療・保健・介護制度の限界	第 72 回日本公衆衛生学会総会	津市	2013 年 10 月
139	田尻雅美	胎児性水俣病患者の現在からみる、水俣病補償救済制度の課題	第 2 回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2013 年 9 月
140	田尻雅美	胎児性水俣病患者の現在の暮らし	シンポジウム胎児性水俣病が問いかける―公式認定 60 年後の今日から	熊本市	2013 年 2 月
141	田尻雅美、井上ゆかり	水俣病被害の地域集積性と補償・救済制度の不整合(第 2 報)	第 71 回日本公衆衛生学会総会	山口市	2012 年 10 月
142	田尻雅美	水俣病被害の地域集積性と補償・救済制度 ― 医学モデルからの脱却に向けて	第 2 回障害学国際研究セミナー	京都市	2011 年 11 月
143	田尻雅美、井上ゆかり	水俣病被害の地域集積性と補償・救済制度	第 70 回日本公衆衛生学会	秋田市	2011 年 10 月
144	田尻雅美	水俣学現地研究センター健康・医療・福祉相談の 5 年	第 6 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2011 年 1 月
145	井上ゆかり	芦北の漁村における毛髪・臍帯水銀値、健康障害、補償救済制度の連環	第 10 回水俣病事件研究交流集会	新潟市	2015 年 1 月
146	井上ゆかり、田尻雅美	水俣病多発漁村における毛髪・臍帯水銀値と補償救済制度	第 73 回日本公衆衛生学会総会	宇都宮市	2014 年 11 月
147	井上ゆかり	熊本県芦北町女島という漁村 ― 目の前が冷蔵庫というくらし	熊本学園大学水俣学研究センター第 22 回公開セミナー	水俣市	2014 年 8 月
148	井上ゆかり、田尻雅美	水俣病多発漁村における補償・救済制度の利用と疾病悪化に関する評価の試み	第 72 回日本公衆衛生学会総会	津市	2013 年 10 月
149	井上ゆかり	水俣北部のある漁村における水俣病の現状と漁業	第 2 回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2013 年 9 月
150	井上ゆかり、田尻雅美	水俣病多発漁村における漁業と健康被害(第 1 報)	第 71 回日本公衆衛生学会総会	山口市	2012 年 10 月
151	井上ゆかり	海に生きる人々と水俣病	第 38 回倫理創成研究会フォーラム	神戸市	2010 年 12 月
152	荻原修子	Investigating life histories: communicating messages from the past' in the panel of "The day after illness experiences of Minamata disease and some possibilities of multi-layered ethnography	International Union of Anthropological and Ethnological Sciences	千葉市	2014 年 5 月
153	原田正純	水俣学事始め	第 98 回日本消化器病学会総会(特別講演)	東京	2012 年 4 月
154	原田正純	水俣病から現代社会を考える	第 26 回人権啓発全国研究集会(基調講演)	熊本市	2012 年 2 月
155	除本理史	水俣病特措法とガッツ分社化	日本環境学会第 36 回研究発表会	横浜市	2010 年 6 月
研究班２　環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価					
156	Hanada,M.	From the experience of MTP and Minamata Disease: Some questions on the Precautionary principle and compensation for victims and sufferers: Face to the industrial pollution and disaster	International Conference on Risk Communication and the Possibility Towards Conctruvtive Solutions for A Healthy Future of Map Ta Phut	バンコク市(タイ)	2013 年 3 月

157	Hanada,M.	Precautionary principle and compensation for victims and sufferer:Face to the industrial pollution and disaster	第3回リスクコミュニケーション円卓会議	マプタプット市(タイ)	2012年12月
158	花田昌宣	社会連帯経済の制度的革新とフランス版社会的協同組合(SCIC)の10年	社会政策学会第125回秋季大会	上田市	2012年10月
159	Hanada, M.	Crise economique et sociale et Economie sochiale en tant que l'alternative	第5回社会的経済モンプラン国際会議	シャモニー市(フランス)	2011年11月
160	Hanada, M.	Role of People Movement : Experience from the Minamata Disease in Japan, What are the Lessons?	Map Ta Phut Seminar	マプタプット市(タイ)	2011年1月
161	Takashi Miyakita	Japan's Decades of Social Conflict and Community Governance: Minamata and Ashikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and Collaboration and "Minamata Studies"	The 8th National Conference for Japanese Studies in Thailand	バンコク市 (タイ)	2014年12月
162	宮北隆志	水俣学 ―「失敗の教訓」を将来に活かす	第45回日本看護学会ヘルスプロモーション(学術集会基調講演)	熊本市	2014年8月
163	宮北隆志	環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治と「水俣学」	政治社会学会(ASPOS)第4回研究大会	吹田市	2013年11月
164	Takashi Miyakita	Minamata and Ashikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and Collaboration and "Minamata Studies"	The Second International Annual Global and Regional Studies Symposium	バンコク市 (タイ)	2013年8月
165	宮北隆志	社会的困難に長年向き合う地域における「生活の質」と多様な主体による「地域運営」	第54回日本社会医学会総会(シンポジウム)	東京	2013年7月
166	Miyakita,T.	The Role of Open Research Center for Minamata Studies, Kumamoto Gakuen University and Research in Map Ta Phut area, Rayong Province	International Conference on Risk Communication and the Possibility Towards Conctruvtive Solutions for A Healthy Future of Map Ta Phut	バンコク市(タイ)	2013年3月
167	宮北隆志	マプタプットの環境と健康	第3回リスクコミュニケーション円卓会議	マプタプット市(タイ)	2012年12月
168	宮北隆志	社会的困難に長年向き合う地域における「生活の質」と多様な主体による「地域運営」	第71回日本公衆衛生学会フォーラム	山口市	2012年10月
169	宮北隆志	Panel Discussion: Experience sharing from Japan, Canada and Thailand	1st Community Health Impact Assessment (CHIA) Conference	バンコク市 (タイ)	2012年7月
170	宮北隆志	マプタプットの環境と健康	第2回リスクコミュニケーション円卓会議	マプタプット市(タイ)	2012年5月
171	宮北隆志	マプタプットの環境と健康	第1回リスクコミュニケーション円卓会議	マプタプット市	2012年3月
172	Miyakita,T.	Quality of life and community governance in the region facing decade of social hardships:Fifty five years experience of Minamata disease and revitalization of Minamata and Ashikita region	JSPS symposia 2011	マンチェスター市(英国)	2012年1月

173	宮北隆志	水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした多面的なヘルスプロモーションの展開（第3報）「円卓会議」の立ち上げから市民参画型の「資源物ステーション」調査へ	第70回日本公衆衛生学会総会	秋田市	2011年10月
174	Miyakita, T.	Realizing sustainable Minamata and Ashikita region and Minamata Studies	International Conference for Environmental Governance	台南市（台湾）	2011年1月
175	Nakachi,S.	Sixty years of Minamata disease experience :What are the lessons	Discussion on mercury intoxication and lessons learned from Minamata Disease within the framework of Minamata Convention on Mercury	ジャカルタ（インドネシア）	2015年3月
176	中地重晴	水銀条約の批准に向けた日本の課題	第10回水俣病事件研究交流集会	新潟市	2015年1月
177	中地重晴	日本の産廃不法投棄の現状と課題	豊島学(楽)会第8回研究発表会	徳島県豊島	2014年4月
178	中地重晴	水銀条約の内容と日本の課題	第9回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2014年1月
179	中地重晴	水銀条約の課題	第2回環境被害に関する国際フォーラム	水俣市	2013年9月
180	中地重晴	タイ東部臨海工業団地と住民のリスクコミュニケーションのあり方	リスクコミュニケーションとマップタブットの健康的な将来のための建設的解決に向けた可能性についての国際会議	バンコク市（タイ）	2013年3月
181	中地重晴	二次災害防止のための有害物質管理のあり方	エコケミストリー研究会効率的環境汚染測定・評価技術フォーラム	千葉市	2011年9月
182	中地重晴	豊島の跡地をどう活用するのか	豊島学(楽)会第5回研究発表会	徳島県豊島	2011年4月
183	山中 進	地域論のすすめ	立正地理学会第68回総会・研究発表大会	東京	2013年6月
184	藤本延啓	大規模不法投棄問題に関する住民の行為と問題認識　「豊島事件」を事例として	海外事情研究所国際学術交流研究報告会	熊本市	2015年3月
185	藤本延啓	不法投棄問題に対する社会史的アプローチ ― 豊島住民はどのように不法投棄問題と向き合ってきたか：S氏のライフヒストリーから	第49回環境社会学会大会	福島市	2014年6月
186	藤本延啓	「豊島」への社会学的アプローチとその問題①	第5回ジオコミュニケーション・セミナー	高松市	2014年3月
187	藤本延啓	「円卓会議」のゆがみと水俣病の教訓	第2回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2013年9月
188	藤本延啓	地方自治体と地元住民における大規模不法投棄問題　37年目の「豊島事件」を事例に	第45回環境社会学会大会	秋田県大潟村	2012年6月
189	藤本延啓	水俣市における廃棄物政策と市民 ― ゼロ・ウェイスト円卓会議に着目して	西日本社会学会第70回大会	鹿児島市	2012年5月
190	藤本延啓	水俣ごみ	瀬戸内海研究フォーラムin徳島	徳島市	2010年8月
191	藤本延啓	水俣市のゼロ・ウェイスト宣言	第18回環境自治体会議	福岡県大木町	2010年5月

192	赤木洋勝	世界の水銀汚染と国際技術協力	日本土木学会環境水理部会研究集会 2012 in 水俣	水俣市	2012年5月
193	赤木洋勝	水銀汚染 —世界・水俣	環境ベテランズファームセミナー	東京	2012年4月
194	赤木洋勝	水銀を捉える：水俣から世界へ	第20回日本環境化学会討論会	熊本市	2011年7月
195	島田美幸、仲井邦彦、熊田希、柳沼稍、黒川修行、佐藤洋、赤木洋勝	母乳中に含有される水銀形態	第81回日本衛生学会	東京	2011年3月
196	赤木洋勝	Analytical Quality Control	International Workshop on Mercury in the Contaminated Sites：Characterization, Impacts and remediation	Piran, Slovenia	2010年10月
197	赤木洋勝	水俣工場の操業と水銀流出	水俣フォーラム明治大学展 総合講座「水俣病」第4回(化学編)	東京	2010年8月
研究班３　水俣学アーカイブス構築の試み					
198	花田昌宣	新日本窒素における工職身分撤廃闘争と企業内賃金決定	第128回社会政策学会春季大会	八王子市	2014年6月
199	花田昌宣	水俣学関連資料の管理活用の現状と課題	法政大学大原社研・環境アーカイブズ統合記念シンポジウム	東京	2013年11月
200	花田昌宣	被害住民の現在と水俣学の国際的展開	第2回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2013年9月
201	丸山定巳	水俣病の教訓を活かす — 発生・拡大・補償救済をめぐって	第2回環境被害に関する国際フォーラム(基調講演)	熊本市	2013年9月
202	丸山定巳	水俣病の50年水俣病事件の教訓を福島にどう生かすか	私たちは福島にどう向き合うべきか～過去から現在、未来を学ぶ～(基調講演)	宇都宮市	2012年5月
203	磯谷明徳	戦後日本の化学工業の変容、チッソと労働組合	第128回社会政策学会春季大会	八王子市	2014年6月
204	磯谷明徳	戦後日本の化学工業の変容とチッソ	第25回チッソ労働運動史研究会	水俣市	2014年3月
205	富田義典	戦後労使関係史における賃金闘争の位置	第128回社会政策学会春季大会	八王子市	2014年6月
206	井上ゆかり	水俣学アーカイブスの取り組み―新日本窒素労働組合資料から	労働者の権利侵害と産業公害に関する国際セミナー	水俣市	2012年12月

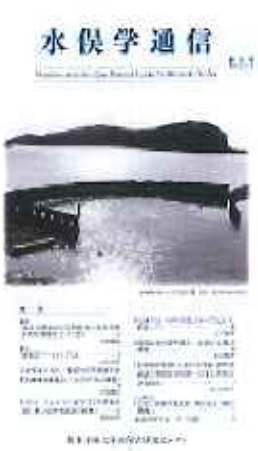
第六章　研究成果の公開状況

(1)　水俣学研究センター刊行物

（ｉ）新日本窒素労働組合機関紙『さいれん』復刻版、花田昌宣・山本尚友監修、柏書房

配　本	タイトル	発刊年月
第1回配本	「組合結成と身分制撤廃闘争」	2010年12月
第2回配本	「企業合理化と安定賃金争議」	2011年6月
第3回配本	「長期抵抗闘争と水俣病への目覚め」	2011年12月
第4回配本	「水俣病裁判への本格的関わり」	2012年6月
第5回配本	「会社の存続・強化を訴えて」	2013年1月
第6回配本	「チッソの逃走をゆるさない」	2013年6月

（ⅱ）水俣学通信（水俣学研究センター情報紙）　第 19 号～39 号



（iii）水俣学ブックレット

No	タイトル	著者・編著者	発行年月
No.8	「失敗の教訓を活かす―持続可能な水俣・芦北地域の再構築―」	宮北隆志	2010年5月
No.2	「"負の遺産"から学ぶ～坂本しのぶさんと語る～」増刷	原田正純	2012年2月
No.6	「水俣病小史　増補版」	高峰武	2012年3月
No.9	「水俣からのレイトレッスン」	水俣学研究センター	2013年3月
No.10	「水俣病と向き合った労働者の軌跡」	花田昌宣・井上ゆかり・田本尚友	2013年6月
No.11	「水銀ゼロをめざす世界　水銀条約と日本の課題」	中地重晴	2013年10月
No.12	「新版 ガイドブック 水俣を歩き、ミナマタに学ぶ」	水俣学研究センター	2014年11月
No.13	「いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～」	花田昌宣・中地重晴	2015年3月

（iv）　水俣学研究（研究紀要）

第２号　2010年３月31日
第３号　2011年３月31日
第４号　2012年３月31日
第５号　2014年３月31日
第６号　2015年３月31日

（v）「水俣学講義　第５集」花田昌宣・原田正純編著、2012年８月

（vi）「 原田正純追悼集『この道を―水俣から』」熊本学園大学水俣学研究センター・熊本日日新聞社編、2012年12月

（vii）「活性化するタイの地域健康影響評価」宮北隆志監訳、2013年３月

（viii）「人と鉱山　ルーイの未来」宮北隆志監訳、2013年３月

（ix）『「さいれん」復刻版刊行記念シンポジウム報告書』井上ゆかり編著、2014年３月

（x）資料叢書Ⅵ『案賃闘争座談会　西野六郎氏を囲んで』花田昌宣編著、2015年３月

(2) 水俣学講義

第9期　2010年9月30日～2011年1月20日、全14回

開催月日	タイトル	講師
9月30日	水俣を視る眼：水俣学の試み	花田昌宣（熊本学園大学）
10月7日	水俣病の50年	原田正純（熊本学園大学）
10月14日	水俣病の発生・拡大と地域社会	丸山定巳（熊本学園大学）
10月21日	慢性ヒ素中毒 ―世界の現況	堀田宣之（緑が丘病院理事長）
11月4日	水俣湾・八代海底質中水銀の三次元分布	高安卓滋（鹿児島大学大学院）
11月11日	いま国連で生きる水俣の教訓 ―水銀条約	井芹道一（熊本日日新聞政経部長・論説委員）
11月18日	豊かに生きるとは	旗野秀人（新潟水俣病安田患者の会事務局）
11月25日	81歳・波乱万丈の生きざま	宮本 巧（水俣病患者）
12月2日	「私」と「公」の狭間のなかで	潮谷義子（長崎国際大学学長）
12月9日	厉総のイワシ漁業の歩みとイワシの生態	平本紀久雄（元千葉県水産試験場）
12月16日	化学物質管理に関する国際動向-2020年目標の実現に向けて	中地重晴（熊本学園大学）
1月6日	健康影響評価の可能性と限界ータイ・マプタプット工業団地の事業差し止めを事例として	宮北隆志（熊本学園大学）
1月13日	公害と社会福祉：水俣病事件の現在と課題	花田昌宣（熊本学園大学）
1月20日	まとめ	原田正純（熊本学園大学）

第10期　2011年9月22日～2012年1月19日、全14回

開催月日	タイトル	講師
9月22日	水俣学：最初の一歩	花田昌宣（熊本学園大学）
9月29日	水俣病補償・救済と地域社会	丸山定巳（熊本学園大学）
10月6日	胎児性水俣病	原田正純（熊本学園大学）
10月13日	水俣病を通してジャーナリズムを考える	牧口敏孝（元熊本放送報道部）
10月20日	東日本大震災と福島原発事故	中地重晴（熊本学園大学）
11月10日	世界の水銀汚染	原田正純（熊本学園大学）
11月17日	雨にも負けず、風にも負けず　これが私の生きる道	坂本美代子（チッソ水俣病関西訴訟勝訴原告/行政認定未補償協定患者）
11月24日	教育と水俣病ー私にとっての水俣病	広瀬武（水俣芦北退職教職員等協議会/元小学校教師）
12月1日	私の水俣病	緒方正実（水俣市立水俣病資料館語り部）
12月8日	水俣病といのち	最首悟（和光大学名誉教授）
12月15日	福祉の原点 人間の尊厳ー水俣から学んだこと	松岡洋之助（元NHKチーフディレクター）
12月22日	水俣（病）に学び、未来を想う	森枝敏郎（前熊本県健康福祉部長/元熊本県水俣振興推進室長）
1月5日	水俣病と疫学ー命のつながりを目指して	頼藤貴志（岡山大学大学院環境生命科学研究科）
1月19日	公害被害／社会的困難を抱える地域の再構築とその評価について	宮北隆志（熊本学園大学）

第11期　2012年9月21日～2013年1月25日、全15回

開催月日	タイトル	講師
9月21日	水俣病と地域社会	丸山定巳（熊本学園大学）
9月28日	水俣病50年の歴史と現在 "水俣学の試み"	花田昌宣（熊本学園大学）
10月5日	福島原発事故と放射能汚染と付き合う社会の到来	中地重晴（熊本学園大学）
10月12日	DVD上映	
10月19日	水俣病は終わらない、今後の課題	大石利生（水俣病不知火患者会）
10月26日	私の人生ー水俣病にうばわれた	生駒秀夫（水俣病家庭互助会）
11月9日	裁判の支援を通して見えてきたもの	平郡真也（溝口訴訟、互助会訴訟弁護団事務局）
11月30日	水俣湾ヘドロ処理と埋め立て地の現在	小松聰明（元水俣湾公害防止事業所）
12月7日	国策に翻弄される地域ー水俣・福島・沖縄	宮北隆志（熊本学園大学）
12月14日	水俣病と健康危機管理　ヒ素中毒と放射性物質健康影響事例	緒方剛（茨城県庁筑西保健所）
12月21日	水俣 希望の命ー胎児性患者さんとの20年	吉崎健（NHKプラネット九州支社）
1月11日	カネミ油症と水俣病	下田守（下関市立大学）
1月24日	予防原則とは何か：原発事故と放射線防護	西崎伸子（福島大学）
1月25日	水俣学の今後の課題	花田昌宣（熊本学園大学）

第12期　2013年9月26日～2014年1月23日、全15回

開催月日	タイトル	講師
9月26日	水俣からのレイトレッスン：水俣学への導入	花田昌宣（熊本学園大学）
10月3日	水銀に関する水俣条約外交会議とは何か、どんな条約なの？	中地重晴（熊本学園大学）
10月10日	亡き母の水俣病を認めさせた36年間の闘い	溝口秋生（溝口訴訟原告本人） 高倉史朗（溝口訴訟を支える会）
10月17日	DVD上映	
10月24日	水俣への旅がはじまりだった	小林茂（ドキュメンタリー映画監督）
11月7日	「みなまた」と私	宮井正彌（姫路独協大学特別教授）
11月14日	チッソ労働者は水俣病にどう向きあったか	石田博文（元新日窒労組執行委員）
11月21日	記憶と忘却ー水俣病を取材する理由	東島大（NHK熊本放送局記者）
11月28日	胎児性水俣病は今　放置された世代	山尻雅美（熊本学園大学）
12月5日	海とともに生きる人びと	井上ゆかり（熊本学園大学）
12月12日	水俣病認定基準問題の解説と今日の課題ーチッソ水俣病関西訴訟における責任論、病像論の帰結	三浦洋（阪南中央病院内科・社会医療法人阪南医療福祉センター理事長）
12月19日	水俣病訴訟最高裁判決の意味と現在の課題	山口紀洋（吉勝法律事務所・弁護士）
1月9日	水俣から考えることー一人の市民として	坂本直充（前水俣病資料館長・水俣市役所）
1月16日	「中央」と「地方/地域」：差別と犠牲のシステム　福島・沖縄・水俣	宮北隆志（熊本学園大学）
1月23日	水俣学がめざすもの	花田昌宣（熊本学園大学）

第13期　2014年9月25日～2015年1月22日、全15回

開催月日	タイトル	講師
9月25日	水俣学への誘い	花田昌宣（熊本学園大学）
10月2日	胎児性水俣病患者の過去と現在	田尻雅美（熊本学園大学）
10月9日	認定制度の現状と矛盾－58年経てもなお続く行政的水俣病の問題	井上ゆかり（熊本学園大学）
10月16日	水俣病の今日までの流れ	上村好男（水俣病互助会会長）
10月23日	水銀条約の内容と日本の課題	中地重晴（熊本学園大学）
11月6日	"「水俣病」とともに語るときに私の語ること"－水俣学現地センターから	下地明友（熊本学園大学）
11月13日	福島原発事故～避難にみる構造的問題－水俣の歴史に学ぶ	佐藤彰彦（福島大学うつくしまふくしま未来センター）
11月20日	熊本水俣病第一次訴訟	坂東克彦（水俣病第一次訴訟弁護団/新潟水俣病元弁護団長）
11月27日	私が出会った水俣病事件	伊東紀美代（NPO法人水俣病協働センター）
12月4日	「水俣」のテレビドキュメンタリー・アーカイブ	小林直毅（法政大学社会学部）
12月11日	水俣病報道と全国紙の役割	野上隆生（朝日新聞編集委員兼論説委員）
12月18日	DVD上映	
1月8日	水とコモンズ：水源管理としての米国国立公園・国有林	森下直紀（和光大学）
1月15日	「失敗の教訓」を将来に活かす－急速な工業化が進むタイでの取り組み	宮北隆志（熊本学園大学）
1月22日	世界の水俣病の現状と未来へのメッセージ	花田昌宣（熊本学園大学）

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar01

(3)　公開講座

第７期　「語る・伝える：次の世代に」

期日：2010年10月５日～11月２日、会場：水俣市公民館および水俣市婦人会館
後援：水俣市・水俣市教育委員会・熊本県人権教育研究協議会
参加者：延170名

開催月日	タイトル	講師
10月５日	沖縄の過去、現在、そして未来	平良嘉男（沖縄県西原町立西原中学校校長）
10月12日	被爆体験の継承 ―被爆の記憶のない世代として―	川副忠子（長崎県被爆教職員の会会長、元小学校教諭）
10月19日	被差別部落から	野口誠也（熊本市立託麻東小学校校長、熊本県人権教育研究協議会会長）
10月26日	教育と水俣病（私にとっての水俣病）	広瀬　武（元小学校教諭）
11月２日	水俣をみる外の目と内の目	花田昌宣（熊本学園大学）

チラシと10月５日の様子

第８期　「地域をつくる」

期日：2011年10月４日～2011年11月１日　会場：水俣市公民館第一研修室
後援：水俣市、参加者：延164名

開催月日	タイトル	講師
10月４日	やる気を起こせば、必ず奇跡が起きる	豊重哲郎（鹿屋市串良町柳谷自治公民館長）
10月11日	自然エネルギーでまちおこし	中越武義（高知県梼原町前町長）
10月18日	「学習と交流」で地域をつくる―九州ツーリズム大学・地域づくりインターン事業	江藤訓重（熊本ツーリズムコンソシアム会長）
10月25日	希望のチカラ	玄田有史（東京大学社会科学研究所）
11月１日	近年の地域づくりの動向	丸山定巳（熊本学園大学）

案内チラシと１日目の様子

第 9 期　「原田先生とともに」

期日：2012 年 9 月 25 日～10 月 23 日、会場：水俣市公民館第一研修室
後援：水俣市、参加者：延 211 名

開催月日	タイトル	講師
9 月 25 日	原田先生の最後の仕事	花田昌宣（熊本学園大学）
10 月 2 日	三池 CO 闘争闘いつづけ 先生と多くの仲間との共闘	沖克太郎（三池高次脳連絡会議副議長）、清水栄子（三池 CO と共闘の会事務局長）
10 月 9 日	原田先生から学ぶ 一法律家、社会科学者、そして市民として	淡路剛久（日本環境会議理事長）
10 月 16 日	同行の人	上村好男・坂本フジエ・伊東紀美代（水俣病患者互助会）
10 月 23 日	原田先生と水俣病	丸山定巳（熊本学園大学）

チラシと 10 月 16 日の様子

第 10 期　「海外事情あれこれ　聞きたくてもなかなか聞けない話」

期日：2013 年 10 月 15 日～11 月 12 日、会場：水俣市公民館第一研修室
後援：水俣市、参加者：延 110 名

開催月日	タイトル	講師
10 月 15 日	洪水後のタイ社会の現状	吉村千恵（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 22 日	韓国の文化と東アジア	中　明直（熊本学園大学外国語学部）
10 月 29 日	中国の変貌する親子関係と法	陳　宇澄（熊本学園大学社会福祉学部）
11 月 5 日	国際結婚を考える ーロシア人と日本人の場合	ムヒナ　ヴァルヴァラ（熊本学園大学経済学部）
11 月 12 日	原田先生と回った世界の水銀汚染 ー水俣条約のその後	中地重晴（熊本学園大学社会福祉学部）

チラシと 10 月 22 日の様子

第 11 期　「地域から学ぶ社会福祉の最前線」

期日：2014 年 9 月 30 日～10 月 28 日、会場：水俣市公民館第一研修室

後援：水俣市・水俣市社会福祉協議会、参加者：延べ 191 名

開催月日	タイトル	講師
9 月 30 日	相良村での医療・福祉について	緒方俊一郎（緒方医院院長、社会福祉法人ベートル会理事長）
10 月 7 日	『子どもを真ん中に』を疑う－これからの保育と子ども家庭福祉	宮里六郎（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 14 日	障がい者への差別をなくすための条例と法律	良永彌太郎（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 21 日	生活困窮者自立支援と地域活動	冨田一幸（大阪知的障害者雇用促進建物サービス事業協同組合理事長、NPO 福祉のまちづくり実践機構代表理事）
10 月 28 日	地域に暮らす高齢者の課題と取り組み	小川全夫（前熊本学園大学社会福祉学部）

チラシと 9 月 30 日の様子

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar02

(4) 研究会

(ｉ)　若手研究セミナー

第 1 回　「水俣病事件の現在と水俣学の試み」

期日：2011 年 9 月 1～4 日、会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

受講者：18 名

開催月日	内　容	
9 月 1 日	フィールドワーク①	水俣がはじめての人向け水俣現地案内
	セミナー① セミナー②	「水俣学研究センターの試み」花山昌宣 「水俣病と地域社会」丸山定巳
	フィールドワーク準備ならびに受講者による発表と討論	
9 月 2 日	セミナー③ フィールドワーク②	「チッソと水俣病」山下善寛（元新日窒労組執行委員長） JNC 水俣工場見学
	セミナー④	「水俣病患者と 50 年」原山正純
	フィールドワーク③水俣をみる	採石場→旧工場→梅戸港→八幡残渣プール 案内人：山下善寛
	フィールドワーク準備ならびに受講者による発表と討論	
9 月 3 日	特別セミナー セミナー⑤	「水俣病事件と法」淡路剛久（早稲田大学教授） 「水俣・芦北地域の地域戦略」宮北隆志
	フィールドワーク③	水俣病を聴く
9 月 4 日	セミナー⑥ 討論会 オプショナルツアー	「公害教育と水俣病」田中聡（水俣市立第一小学校教諭） 骨木発電所

第２回　「水俣病事件の現在と水俣学の試み」
期日：2012年９月６～９日、会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
受講者：17名

開催月日	内　容	
９月６日	フィールドワーク① セミナー ① セミナー ②	水俣がはじめての人向け水俣現地案内 「水俣学と水俣病の現状」花田昌宣 「地域社会の形成と水俣病事件史」丸山定巳
	フィールドワークの準備ならびに受講者による発表と討論	
９月７日	特別セミナー セミナー ③ セミナー ④	「四大公害の経験と水俣病」宮本憲一（大阪市立大学名誉教授） 「水俣・芦北の地域戦略と水俣病事件」宮北隆志 「福島原発事故と水俣学」中地重晴
	フィールドワークの準備ならびに受講者による発表と討論	
９月８日	フィールドワーク 討論会	水俣病患者団体のリーダーへのインタビュー他 グループごとにディスカッション 参加者による討論会
９月９日	フィールドワーク報告討論	各グループからの報告と討論

第３回　「水俣病事件の現在と水俣学の試み」
期日：2014年９月５～７日、会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
受講者：14名

開催月日	内　容	
９月５日	フィールドワーク① セミナー ① セミナー ②	水俣がはじめての人向け水俣現地案内 「水俣病被害の現実とそれへのアプローチ：水俣学研究の到達点と初発の意志」花田昌宣 「環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治と『水俣学』」宮北隆志
	フィールドワークの準備ならびに受講者による発表と討論	
９月６日	フィールドワーク② フィールドワークまとめと報告 特別セミナー	「水俣病患者団体・個人等のインタビューから、水俣病半世紀の現在を理解する」 各グループによる報告 「福島第一原発事故の教訓―脱原子力社会に向けて」長谷川公一（東北大学教授、環境社会学会会長）
９月７日	セミナー ③ 参加者による討論会 フィールドワーク報告会及び討論	「水銀条約の今後の課題と水俣湾公害防止対策事業の40年の検証」中地重晴 各グループでディスカッション後討論会

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar08

（ii）　定例研究会
第20回～23回　2010年４月24日～７月９日（全４回）
第24回　2011年３月３日（講師急病のため中止）
第25回　2013年１月30日
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar09

（iii）水俣病事件研究交流集会

第６回

期日：2011年１月８日～９日、会場：水俣市公民館、参加者：延べ240人

開催月日	内　容	報告者
１月８日	テーマ：自由報告	
	「漁村の民俗論理Ⅱ」	飯嶋秀治（九州大学）
	「『原発』と『水俣病』の類似　上関（山口県）と川内（鹿児島県）で起こっていること」	佐藤正典（鹿児島大学）
	「看護の視点からの水俣学へのとりくみ」	山口忍（順天堂大学）
	テーマ：水俣病訴訟と補償制度	
	「初期新潟水俣病の診断要項と発症閾値」	斎藤恒（木戸病院）
	「チッソ・アセトアルデヒド工場操業停止（1968年５月18日）後の出生者の症状 第２報　症例の追加報告－特に1969年11月後の出生者の症状」	藤野糾（水俣協立病院）
	「関西訴訟の患者たちのその後－坂本美代子さんを中心に」	山中由紀、木野茂（立命館大学）
	「I氏訴訟およびF氏訴訟について」	康由美（大阪法律センター法律事務所）
	「水俣病認定義務付け訴訟判決の及ぼす波及効果」	三角恒（三角法律事務所）
	意見交換	
	若手セッション	
	「原田先生から見た水俣病事件」	原田正純・山中由紀
１月９日	テーマ：現地より１	
	「水俣学現地研究センター健康・医療・福祉相談の５年」	田尻雅美（熊本学園大学）
	「水銀条約の経過と問題点」	中地重晴（熊本学園大学）
	テーマ：現地より２	
	「『まちづくり』にかんして」	山下善寛（水俣の暮らしを守る！みんなの会）
	「低炭素社会実現の為の行政・市民の役割」	大嶽弥生（水俣の暮らしを守る！みんなの会）
	自立した水俣・芦北つくり意見交換	
	テーマ：水俣病救済とチッソ分社化	
	「チッソ事業再編計画の問題点」	矢作正（浦和大学）
	「チッソ再編計画の意味」	酒巻岐章、花田昌宣（熊本学園大学）
	意見交換	

第７回

期日：2012年2012年１月７日～８日、会場：水俣市公民館、参加者：延べ280人

開催月日	内　容	報告者
１月７日	テーマ：自由報告	
	「社会調査者は何をみたか　水俣病被害の構想的理解を求めて」	森下直樹（立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー環境社会学会国際交流委員）
	「民俗から命脈へ－教育の視点から」	飯嶋秀治（九州大学）
	質疑応答	
	テーマ：水俣病の医学　特措法に物申す	
	「胎児期、小児期にメチル水銀曝露を受けた人に合併した精神障害の治療－３例の経験から」	丸山公男（新潟青陵大学）
	「特措法施行後の新患者の症状から学ぶもの」	斎藤恒（医師）

	「地域指定外の汚染の状況」 「特措法における対象地域外、生年月日外で救済対象とされた者の情報公開問題」 「公害健康被害等補償法と食品衛生法と、中毒症について」 質疑応答 テーマ：訴訟報告 「新潟水俣病三次訴訟の現状…『支援』の立場から」 「溝口訴訟と第2世代訴訟」 質疑応答 テーマ：自由報告 「水俣の歌をとおして」	高岡滋（みなまた協立クリニック） 三角恒（三角法律事務所） 津田敏秀（岡山大学） 萩野直路（木戸病院） 山口紀洋（古勝法律事務所） 柏木敏治（シンガーソングライター）
1月8日	テーマ：自由報告 「女島調査第1報」 「移動診療所の活動」 「『10年後の水俣病研究班の疫学調査』に関する再解析結果について」 アピールタイム シンポジウム「いま、改めて水俣病の教訓とは」	 井上ゆかり（熊本学園大学） 山口忍（茨城県立医療大学） 頼藤貴志（岡山大学） 三角弁護士 ほか コーディネート：花田昌宣 メディア：牧口敏孝 支援者：高倉史朗 水俣学：原田正純 地元市民：山下善寛・坂本龍虹 在野の研究者：宮澤信雄

第8回

期日：2013年1月12～13日、会場：水俣市公民館、参加者：延べ280人

開催月日	内　容	報告者
1月12日	テーマ：原田先生追悼 「原田先生ありがとう」 テーマ：自由報告 「昭和40年代水俣における訪問看護活動の成果から住民との協働活動を考える」 「漁村の命脈」 「国際的水銀規制（仮称　水俣条約）の検討状況と課題」 「不知火海沿岸住民におけるメチル水銀汚染について　臍帯中メチル水銀濃度の変動と環境疫学」 質疑応答 テーマ：水俣病の調査から 「遅発性水俣病と脳水銀 文献レビュウー」 「2012年6月24日の住民健康調査結果」 「山間部の住民検診からみえる水俣病の真実」 「新潟水俣病行政不服の1例と体性感覚障害」 「新潟のメチル水銀曝露－103名成人の神経学的検査結果」 質疑応答	加藤タケ子、加賀田清子、渡辺栄一、永本賢二ほか（ほっとはうす） 山口忍（茨城県立医療大学） 飯嶋秀治（九州大学） 中地重晴（熊本学園大学） 安藤哲夫（鹿児島大学） 三浦洋（阪南中央病院） 高岡滋（みなまた協立クリニック） 山近峰子（水俣協立病院） 斎藤恒（木戸病院） 丸山公男（新潟青陵大学）

1月13日	「水俣病と『住民手帳』―障害学の視点から」 「水俣から福島へ―伝えるべき教訓と今福島が求めているもの」 「新潟における水俣病の風評被害―一事例報告」 「水俣病被害市民の会結成の意味―特措法と公健法」 「水俣病に時効・除斥なし―ノーモア・ミナマタ訴訟での時効除斥論の到達」 質疑応答 テーマ：原田正純・宮澤信雄追悼 「原田正純をしのぶ」 「宮澤信雄をしのぶ」	森下直紀（立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー・環境社会学会国際交流委員） 東島大（NHK） 萩野直路ほか（木戸病院） 坂本龍虹、山下菁寛（水俣病被害市民の会） 菅一雄（ノーモア・ミナマタ国賠等訴訟弁護団） 高峰武（熊本ＨＨ新聞社） 丸山定巳（熊本学園大学）

第9回

期日：2014年1月11日～12日、会場：水俣市公民館、参加者：延べ280人

開催月日	内　容	報告者
1月11日	テーマ：水俣条約 「水銀条約の内容と日本の課題」 質疑応答 テーマ：自由報告 「『命脈』から『生人』へ」 「小児性水俣病患者の介護の実態」 質疑応答 テーマ：水俣病の医学 「水俣病の感覚障害について：全身性感覚障害の観点から」 「水俣病における運動失調」 「新潟水俣病患者の発症時期と魚喫食歴」 質疑応答	 中地重晴（熊本学園大学） 飯嶋秀治（九州大学） 山尻雅美（熊本学園大学） 鶴田和仁（潤和会記念病院） 斎藤恒（木戸病院） 萩野直路（木戸病院）
1月12日	テーマ：2013年4月水俣病最高裁判決が拓いた水俣病事件史の新たな地平 「水俣病最高裁判決が拓いた水俣病事件史の新たな地平」 「溝口訴訟・最高裁判決が切り開いた地平」 「F氏訴訟と補償協定締結拒否」 「結審を迎える互助会訴訟の現状と課題」 「新潟二次訴訟と認定義務づけ訴訟」 「下田良雄さん不服審査会認定裁決の意味」 「水俣病の地元、水俣では」 「患者原告の発言」 「ミナマタ第2次訴訟について」 「政治解決による救済者、特措法救済対象者の新たな水俣病認定申請について」 討論・意見交換	 花田昌宣（熊本学園大学） 山口紀洋（吉勝法律事務所） 康由美（大阪法律センター法律事務所） 谷洋一（水俣病協働センター） 高島章（新潟水俣病訴訟事務局） 伊東紀美代（水俣病協働センター） 坂本龍虹（水俣病被害市民の会） 水俣・新潟の原告 中村輝久（ノーモア・ミナマタ第2次国家賠償等請求訴訟弁護団） 三角恒（三角法律事務所）

第 10 回

期日：2015 年 1 月 10 日～1 月 12 日、会場：新潟青陵大学、参加者：延べ 230 人

開催月日	内　容	報告者
1 月 10 日	テーマ：自由報告	
	「水俣市における川内原発再稼働と避難計画問題」	大嶽弥生（原発避難計画を考える水俣の会）
	「病の民俗誌－石牟礼道子『苦海浄土』批評から」	飯嶋秀治（九州大学）
	「水銀条約の批准に向けた日本の課題」	中地重晴（熊本学園大学）
	質疑応答	
	テーマ：当事者の力、周囲の力	
	「『水俣』を伝えることから地域活動へ」	山嶋いづみ（「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク）
	「水俣病事件から学んだ社会福祉－未来につながる取り組み　ほっとはうす 16 年の歩み」	加藤タケ子（ほっとはうす）
	「『支援者』は何を見聞きし、支えるのか　精神保健福祉からみた驚きの水俣」	三野宏治（東京福祉大学）
	「『事件』を解決できるのは『当事者・市民』の力」	高見優（ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟）
	「水俣病全面解決をめざして『2013.9.30 提言と新潟の取り組み』」	中村周而（ノーモア新潟水俣病弁護団長）
	質疑応答	
1 月 11 日	テーマ：水俣病の被害実態と認定制度	
	「大規模健康被害としての水俣病について」	下田守
	「阿賀野川の汚染は、昭和 35 年～40 年末までか」	関川智子（新潟勤医協）
	「阿賀野患者会が取組んでいる潜在被害者の掘り起しによる診断を希望する　新潟水俣病被害者の実態」	酢山省三（新潟水俣病阿賀野患者会）
	「水俣病の認定棄却と水俣病患者の症状」	斎藤恒、萩野直路、丸山公男（木戸病院、新潟青陵大学）
	「水俣病認定患者（新潟）の毛髪水銀濃度と神経症状」	丸山公男（新潟青陵大学）
	「芦北の漁村における毛髪・臍帯水銀値、健康障害、補償救済制度の連環」	井上ゆかり（熊本学園大学）
	質疑応答	
	テーマ：カナダ水俣病と水俣病訴訟の現在	
	「カナダ水俣病の現状と課題：2014 年 9 月現地調査の報告」	花田昌宣（熊本学園大学）
	「新潟水俣病第三次訴訟判決と新潟水俣病 50 年－問われるべきもの」	高島章、萩野直路（新潟水俣病第三次訴訟弁護団長・新潟水俣病第三次訴訟を支援する会）
	「水俣病第二世代訴訟の地裁判決の意味と今後」	山口紀洋（吉勝法律事務所）
	質疑応答	
	フィールドワーク「新潟水俣病現地調査」　案内人：斎藤恒 新潟西港倉庫(地震農薬説)→松浜橋西詰→松浜港(初期調査の対象地域)→ 津島屋・一日市(初期の多発地域)→水原・安田	
1 月 12 日	フィールドワーク「新潟水俣病現地調査」 旧昭和電工鹿瀬工場排水口→鹿瀬工場裏山→東北電力鹿瀬発電所→ 鹿瀬工場有機部門跡地	

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar04

(5) 公開セミナー

第10回　「第1回水俣病を『伝える』セミナー」

期日：2010年8月3日、10日、24日

会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

共催：水俣芦北公害研究サークル、参加者：延54名

開催月日	内容	
8月3日	基礎講座	「水俣病の教訓を伝えるということ」 花山昌宣（熊本学園大学）
8月10日	患者さんと語ろう	上村好男さんの話
8月24日	参加者による討論	

第11回　「自然産業に関する研究会」

期日：2011年2月21日

会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター、参加者：17名

内容	
話題提供	「水俣・芦北地域の農林業について」 福岡博信（芦北地域振興局農業普及・振興課）
討論	山中真也（水俣市農林水産課） 除本理史（東京経済大学経済学部・日本環境会議） 佐無田光（金沢大学人間環境研究科・日本環境会議） 尾崎寛直（東京経済大学経済学部・日本環境会議）

第12回　「自立した水俣芦北地域を考える集い」

期日：2011年5月8日

会場：水俣市公民館ホール

共催：自立した水俣芦北地域研究会、参加者：81名

内容	
講演	「ともに活かしあう社会に向けて－社会的企業の可能性と地域の発展」 炭谷茂（元環境事務次官・環境福祉学会副会長）

第13･14回「福島原発で起きていること－放射能汚染と付き合う社会の到来」

期日：2011年5月10日、11日

会場：水俣市公民館第一研修室（第13回）・熊本学園大学高橋守雄記念ホール（第14回）

参加者：81名（第13回）、167名（第14回）

内容	
講演	「福島原発で起きていること－放射能汚染と付き合う社会の到来」 荻野晃也（元京都大学工学部原子核工学科講師・電磁波環境研究所所長）

第15回　「第2回水俣病を『伝える』セミナー」

期日：2011年8月12日、25日

会場：水俣市公民館第一研修室、参加者：延163名

開催月日	講師
8月12日	原田正純（熊本学園大学水俣学研究センター顧問・医師）
8月25日	坂本フジエ（水俣病患者）

第16回　「カナダ先住民来日 講演会と映画『カナダ先住民と水俣病』」

期日：2011年9月10日、11日
会場：熊本学園大学図書館AVホール・水俣市もやい館ホール
参加者：36名（10日）、73名（11日）

内容	
映画紹介	大類義（元日本大学芸術学部教員、映画作家）
映画上映	「カナダ先住民と水俣病」
解説	原田正純（熊本学園大学水俣学研究センター顧問、医師）
先住民の発言	Mr. Chief.Simon Fobister　チーフ　サイモン フォビスター Ms. Judy Da Sylva　ジュディ デ シルバ Ms. Sylvia Henry　シルビア ヘンリー
質疑応答	

第17回　「第3回水俣病を『伝える』セミナー」

期日：2012年8月8日、10日
会場：熊本学園大学水俣学現地研究センターなど
参加者：延33名

開催月日	内容	
8月8日	DVD上映	「原田先生は何を伝えようとされていたか」
	講演	「今、水俣は―終わらない水俣病」 花田昌宣（熊本学園大学）
8月10日	当事者の話を聞く	坂本フジエ（一次訴訟原告、水俣病認定患者） 上村好男（前水俣病互助会会長） 坂本しのぶ（一次訴訟原告、胎児性水俣病患者）
	報告	各会場からの報告
	自由討論	

第18回　「地域のエンパワメントと社会的合意の形成
―健康影響評価（HIA）に関する国際セミナー」

期日：2012年12月1日
会場：熊本学園大学1173教室
参加者：42名

内容	
特別講演	「社会的合意形成の思想と技術：『空間の履歴』という考え方」 桑子敏雄（東京工業大学教授）
パネルディスカッション	コーディネーター：宮北隆志（熊本学園大学） パネラー：「健康の社会的決定要因と健康影響評価」 藤野善久（産業医科大学・公衆衛生学教室） 「日本での健康影響評価の適用と課題」 原邦夫（帝京平成大学） 「タイにおける地域に根ざした健康影響評価の実践」 ソンポン ペンカン（タイ国家健康委員会）

第 19 回　「労働者の権利侵害と産業公害に関する国際セミナー
ー水俣の経験とタイの現在」

期日：2012 年 12 月 2 日
会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター、参加者：25 名

内 容	
報告	コーディネーター：花田昌宣（熊本学園大学） 「チッソ労働者の視点からみた水俣病」 山下善寛（元新日窒労組執行委員長） 「労働者の権利回復の取り組みとマプタプット問題」 ブンユン ソックマイ（タイ東部労働組合連合） 「水俣学アーカイブスの取り組み」 井上ゆかり（熊本学園大学） 「公害の原点・水俣とマプタプット（MTP）」 ムークスワン ワライポン（タイ環境警鐘と回復）

第 20 回　「第 4 回水俣病を『伝える』セミナー」

期日：2013 年 8 月 9 日、10 日
会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
主催：熊本学園大学水俣学研究センター・水俣芦北公害研究サークル
後援：水俣市教育委員会、参加者：21 名

開催月日	内　容	
8 月 9 日	講演 I	「伝えるために現場をあるく」 花山昌宣（熊本学園大学）
	フィールドワーク I	茂道→坪段→汐見の家
	講演 II	「水俣病は終わっていない」 杉本雄（水俣病認定患者）
	フィールドワーク II	古間から女島まで海岸線をゆく
8 月 9 日	講演	「第 2 世代として生きる」 女島の被害者（第 2 世代訴訟原告）
	意見交換	授業実践のための意見交換

第 21 回　「タイの環境政策の 20 年：マプタプット工業団地の行政訴訟の観点から」

期日：2013 年 10 月 18 日、会場：熊本学園大学 14 号館第 3 会議室
講師：船津鶴代（独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所）

第 22 回　「第 5 回水俣病を『伝える』セミナー」

期日：2014 年 8 月 7 日、会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
共催：水俣芦北公害研究サークル
後援：水俣市教育委員会・芦北町教育委員会・津奈木町教育委員会、参加者：22 名

内　容	
講義 I	「胎児性水俣病患者の過去・現在」 田尻雅美（熊本学園大学）
講義 II	「漁村の暮らしと水俣病」 井上ゆかり（熊本学園大学）
フィールドワーク	百間排水口→坪段→茂道
講演 I	「胎児性世代の裁判では何を求めて闘っているのか」 佐藤英樹（第 2 世代訴訟原告団長）
講演 II	「水俣市茂道での漁業と水俣病」 佐藤巽（水俣病患者）
意見交換・自由討論	「知らないのは罪・知ったかぶりはもっと罪」

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar03

(6)　シンポジウム

・『さいれん』復刻版刊行記念シンポジウム「水俣に生きた労働者の軌跡」

期日：2013年6月28日、会場：くまもと森都心プラザホール

主催：熊本学園大学水俣学研究センター・くまもと森都心プラザ図書館

後援：柏書房・紀伊國屋書店・法政大学大原社会問題研究所、参加者：270名

	内　容
記念講演	「企業と人間のいま、そして労働組合」 佐高信（評論家・週刊金曜日編集委員）
報告	「チッソの労働者の59年」 山下善寛（元新日窒労組執行委員長） 「水俣病と労働者」 石田博文（元新日窒労組執行委員） 「働く者の記録と水俣病」 花田昌宣（熊本学園大学）
挨拶	馬場昇（元衆議院議員）
備考	講演開始1時間前より新日窒労組旧蔵映像資料を上映

・「胎児性水俣病が問いかける－公式認定50年後の今日から」

期日：2013年2月23～24日

会場：熊本学園大学高橋守雄記念ホール（23日）・水俣市公民館ホール（24日）

参加者：102名（23日）・88名（24日）

開催月日	内　容	
2月23日	基調講演	「胎児性水俣病患者と水俣学の課題」 花田昌宣（熊本学園大学）
	シンポジウム	「新潟における胎児性水俣病－発見初期から現在」 斎藤恒（木戸病院） 「胎児性水俣病患者　湯ノ児分校の記録から」 宮部修一（熊本学園大学非常勤講師） 「胎児性水俣病患者の現在の暮らし」 伊東紀美代（水俣病互助会事務局） 田尻雅美（熊本学園大学） 「現在の暮らしと将来への希望」 坂本しのぶ（胎児性水俣病患者） 古山知恵子（胎児性水俣病患者）
2月24日	映画上映	「もっこす元気な愛」監督　寺田靖範／出演　倉田哲也ほか
	講演	「障害者の暮らし－地域での自立生活」 倉田哲也（くまもと障害者労働センター代表） 「社会の中の障害者：現実と制度改革」 東俊裕（内閣府障がい者制度改革推進会議担当常長）
	発言	患者家族、支援者

図　チラシと当日の様子

・「水俣学の 10 年－戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム」
期日：2014 年 12 月 14 日、会場：熊本学園大学 1421 教室
参加者：105 名

第一部　「水俣学に期待するもの」	
記念講演	「水俣病と環境福祉」 炭谷茂（元環境事務次官、恩賜財団済生会理事長） 「公害・環境研究と水俣学への期待」 寺西俊一（一橋大学大学院経済学研究科教授・日本環境会議理事長） 「水俣市の経験と水俣学への期待」 吉井正澄（元水俣市長）
第二部　「水俣学研究の成果報告　水俣学の 10 年」	
報告	「水俣病問題の現在と課題　水俣学の役割と成果」 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長） 「水俣・芦北の地域戦略とその課題」 宮北隆志（熊本学園大学水俣学現地研究センター長） 「情報発信と資料公開」 山本尚友（熊本学園大学水俣学研究センター研究員）
「外部評価委員からのコメントと質疑応答」炭谷氏、寺西氏、吉井氏	

図　チラシと当日の様子

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar03

(7)　国際会議

(ｉ) 第 2 回環境被害に関する国際フォーラム

期日：2013 年 9 月 5~6 日・8 日（7 日ユクスカ・ション）
会場：熊本学園大学高橋守雄記念ホール（5~6 日）・水俣市もやい館ホール（8 日）
参加者：延べ 438 名

5 日	基調講演	「水俣病の教訓を活かす－発生・拡大・補償救済をめぐって」 丸山定己（熊本学園大学）
	特別講演 1	「フタバから遠く離れて」 井戸川克隆（前福島県双葉町長）
	セッション 1	「被害の全容と地域社会への影響、現地からの実情報告」
	カナダ	「カナダ先住民の闘いと女性」 パメラ マンダミン（ホワイトドッグ居留地住民）
	タイ	「環境への警鐘と回復」 ペンチョム セーターン（EARTH 事務局長）
	韓国	「韓国グミにおけるフッ化水素酸流出事故」 イ ユングン（ウォンジン労働環境健康研究所副所長）
	台湾	「台湾の中国石油化学開発安順塩素アルカリ工場の過去と将来」 フウァン ファンヂャン（中華医事科技大学看護科准教授）
	中国	「水俣を手本とし、淮河を『解毒』する」 フオ ダイシャン（淮河水系生態環境科学研究センター）

	新潟	「阿賀のほとりで共に生きる」 旗野秀人（新潟水俣病安田患者の会事務局）
	熊本学園大学	「水俣病と水俣学の試み」 花田昌宣（水俣学研究センター長）
	熊本学園大学	「胎児性水俣病の現在からみる、水俣病補償救済制度の課題」 田尻雅美（水俣学研究センター研究助手）
	熊本学園大学	「水俣北部のある漁村における水俣病の現状と漁業」 井上ゆかり（水俣学研究センター研究助手）
	熊本学園大学	「水俣市『円卓会議』のゆがみと水俣病の教訓」 藤本延啓（社会福祉学部講師）
6日	特別講演2	「日本の環境問題の現状と課題」 淡路剛久（立教大学名誉教授・日本環境会議前理事長）
	セッション2	「被害発生と拡大防止、被害補償と住民の闘い」
	タイ	「マブタプット工業団地における公害と住民の闘い」 ノイ ジャイタン（マブタプット市ポッコック村住民代表）
	カナダ	「カナダにおける人種的な環境差別」 ソア アトキンヘッド（ウィニペグ先住民連帯運動）
	台湾	「CPDC 社安順工場、汚染地区復旧の現状」 リン ジージン（安順地域環境汚染被害者自助組織委員長）
	中国	「河川保護：中国 NGO の行動」 ソンミン（清華大学公共管理学院教授）
	セッション3	「現状から将来への展望」
	台湾	「安順訴訟の分析」 ワン ユーチョン（国立成功大学法学部教授）
	新潟	「新潟水俣病の半世紀を振り返って」 斎藤恒（木戸病院）
	福島	「東京電力福島第一原発事故の被害者救済をめぐる法政策」 福田健治（弁護士、SAFRAN 副代表）
8日	提言	「水俣水銀条約の課題」 中地重晴（水俣学研究センター事務局長）
	患者・住民からの訴え	
	新潟	近 四郎男（新潟水俣病被害者の会語り部）
	水俣	坂本フジエ（水俣病患者互助会副会長）
	水俣	坂本しのぶ（水俣病患者互助会会員・胎児性水俣病患者）
	カナダ	「水銀汚染と共に生きて」 ジュディ デ シルバ（グラッシーナロウズ環境委員会委員長） 「カナダ、北マニトバの水力発電開発及び水銀汚染」 ピーター カウチスキー（マニトバ大学教授）
	パネルディスカッション	「全体討論：水俣病・失敗の教訓を将来に活かす」 各国より報告
	総括、大会宣言	花田昌宣（熊本学園大学）

図　ポスターと当日の様子

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international03

（ii）タイ東部臨海工業団地における公害と健康影響調査報告

【2010年度】ウドンタニ県での住民集会にて講演、環境健康科学ラジャハットウドンタニ大学において研究会を開催。チュラロンコン大学でリスクコミュニケーションに関するセミナー、マブタプット病院環境保健センターで地元住民団体の共同でマブタプット工業団地問題を考えるセミナーを開催。
【2011年度】リスクコミュニケーション円卓会議に向けたワークショップの開催
【2012年度】リスクコミュニケーション円卓会議の開催（全3回）。リスクコミュニケーションに関する国際会議をチュラロンコン大学にて開催。
【2014 年度】東北タイ・ルーイ県における金鉱山問題に関する学術セミナーを、EARTH、並びに、チュラロンコン大学平和と紛争研究センターとの共催で開催。

（iii） カナダ先住民水俣病被害者の受け入れと研究報告

2011年9月カナダ先住民3名、映画監督1名、支援者1名を招聘し、カナダ水俣病の現状を中心に報告を受けるとともに、熊本、水俣、東京で研究集会や講演会を実施した。

また、2013年環境被害に関する国際フォーラムに招聘したカナダ先住民水俣病被害者を迎えて京都及び東京でセミナー及び講演会を開催した。

2011年9月10日「カナダ先住民と水俣病」第16回公開セミナー
会場：熊本学園大学図書館AVホール
2011年9月11日「カナダ先住民と水俣病」
会場：水俣市もやい館ホール
2011年9月16日「環境と生活破壊に抗するカナダ先住民の現在セミナー」
会場：アイヌ文化交流センター（東京都）
主催：熊本学園大学水俣学研究センター
共催：市民外交センター・反差別国際運動日本委員会(IMADR-JC)
講演：サイモン フォビスター、ソア アトキンヘッド、ジュディ デ シルバ、シルビア ヘンリー、大類義
2011年9月17日「カナダ水俣病講演会」
会場：YMCAアジア青少年センター
共催：水俣フォーラム・熊本学園大学水俣学研究センター
講演：原田正純、サイモン フォビスター、ソア アトキンヘッド、ジュディ デ シルバ、シルビア ヘンリー、大類義
2013年9月10日「水俣からMINAMATAへ：加害者は誰か」第52回地球研市民セミナー
会場：ハートピア京都
主催：総合地球環境学研究所
講演：ジュディ デ シルバ、花田昌宣
2013年9月13日「カナダ水俣病先住民の証言」報告交流会
会場：連合会館（東京都）
主催：チッソと国の水俣病責任を問うシンポジウム実行委員会
共催：熊本学園大学水俣学研究センター
基調講演：花田昌宣
報告：ジュディ デ シルバ、ピーター カウチスキー、ソア アトキンヘッド

（iv） 国際会議・学会での研究報告

【2010年】

4月1日、カナダ・モントリオール大学での研究会（リヴィア・モネ教授主催）に原田および花田が招聘され、研究発表を行った。

【2011年】

6月9～13日、「環境ガバナンス」に関する国際会議で宮北が報告（台湾・国立成功大学）

11月7～15日、フランス社会的企業学会にて花田が研究発表（フランス）

11月9～12日　社会的経済に関するモンブラン国際会議で花田昌宣が報告（スイス・シャモニー）

11月16～18日、日韓社会的企業セミナーで花田が報告（ソウル）

【2012年】

1月3～10日、日本学術振興会国際シンポジウムで宮北が報告（英国・マンチェスター）

7月16～17日、第1回タイ・CHIA会議に出席、CHIA: Experience sharing from Japan, Canada and Thailand でパネラーとして宮北が報告（タイ）

【2013年】

8月、The Second Annual Global and Regional Studies Symposium で宮北隆志が発表（タイ）

11月、中国清華大学でのシンポジウム「水俣病の経験とその教訓」に花田が招聘、報告（中国）

【2014年】

8月27日、カナダ・オンタリオ州・グラッシーナロウズでのセミナー「Technical Session on Mercury Poisoning with Japanese and Canadian Medical Personnel」にて下地明友が報告。客員研究員の鶴田和仁も報告した。

9月10日、タイ・チュラロンコン大学でのセミナー「Myths and Fact: Gold mining in Loei」を共催。コメンテーターとして発言。

11月14日、宮北が、「アジアの災害と紛争の現場から：市民参加と協働による創造的復興」API市民フォーラム・広島において、EARTHのベンチョム氏、山下氏と共にパネル発表、「水俣とタイのマプタプット工業団地における産業汚染の経験に基づく交流と協力」に参加、コメンテーターとして発言。

12月18日、第8回タイ・日本研究学会（The 8th Conference for Japanese Studies Association in Thailand）において、"Japan's Decades of Social Conflict and Community Governance" というテーマで宮北が講演し討論に参加。

【2015年】

3月16日、インドネシアのジャカルタで、NGOバリフォーカスが主催するセミナー「インドネシアの小規模金採掘に伴う水銀汚染と健康被害」において中地が「水俣病の経験、教訓」、客員研究員の谷が「水俣病被害者の闘い」を報告した。

3月17～18日、水銀条約の批准に向けたアジア太平洋地域のワークショップでは、中地がオブザーバーとして参加。

3月19日、バーゼル条約、ロッテルダム条約、ストックホルム条約の5月に開催されるCOP（締約国会議）に向けたアジア太平洋地域会合に中地がオブザーバーとして参加。

(8) その他の研究成果等

(ⅰ) 水俣・芦北地域戦略プラットフォーム課題検討会

会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

	テーマ	開催年月日
第16回	地域におけるエネルギー自活について考える	2010.4.26
第17回	水銀規制の国際的動向をまなぶ	2010.5.24
第18回	水俣地域での水銀暴露の分布の変動と水俣湾水銀汚染の現状についてまなぶ	2010.6.28
第19回	茶のみ場（旧称：給茶スポット）をはじめよう	2010.9.27
第20回	地域の情報化と住民による情報発信の将来	2010.10.18
第21回	自然産業につながる人々その3 -水俣・芦北地域の流通と経済-	2011.1.31
第22回	地域の発展と社会的経済の可能性について-炭谷茂講演会事前学習会-	2011.4.11
第23回	水俣・芦北地域の再構築に向けた取り組みの経過と今後の課題	2011.5.23
第24回	第9回：水俣・芦北地域の「再構築」について、今、あらためて考える	2011.11.14
第25回	第10回：水俣市の「円卓会議」が果たすべき役割と機能を考える	2011.12.5
第26回	山江村ケーブルテレビから考える水俣の「地域情報化」	2012.3.12
第27回	『円卓会議と市民参加』シリーズ① 水俣市「円卓会議」の"今"	2012.7.2
第28回	第13回：『円卓会議と市民参加』シリーズ② 「エネルギーと産業円卓会議」と市民参加	2012.7.23
第29回	第14回：『円卓会議と市民参加』シリーズ③「観光と公共交通円卓会議」と市民参加	2012.8.6
第30回	地域再構築の「基本理念」について問い直す～生活の質から社会の質まで～	2012.8.24
第31回	『円卓会議と市民参加』シリーズ④「環境大学・環境学習円卓会議」と市民参加	2012.9.24
第32回	『円卓会議と市民参加』シリーズ⑤『円卓会議と市民参加』のこれから	2013.1.7
第33回	『協働』を実現する取り組みとは？	2013.3.18
第34回	水俣の給食牛乳容器を考える	2013.8.5
第35回	『脱水銀社会』シリーズ①水俣で「脱水銀社会」を考える	2013.11.11
第36回	産廃計画跡地にメガソーラー？-自然資源は誰のものか-	2014.2.3
第37回	『脱水銀社会』シリーズ②水銀リサイクルの現状と課題	2014.9.29
第38回	『エネルギーを選ぶ』シリーズ①川内原発の再稼働を問う	2014.10.27

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar06

(ⅱ) ゼロ・ウェイスト円卓会議（水俣市と連携）

2010年度	第16回～24回 2010年4月22日～2011年2月18日	全19回
2011年度	第25回～32回 2011年8月30日～2012年3月29日	全8回
2012年度	第33回～45回 2012年4月9日～2013年3月11日	全13回
2013年度	第46回～55回 2013年4月15日～2014年3月10日	全10回
2014年度	第56回～65回 2014年4月21日～2015年3月3日	全10回

(ⅲ) チッソ労働運動史研究会

	内　容	開催年月日	開催場所
第15回	今後の研究会の進め方について	2011.1.30	水俣学現地研究センター
第16回	研究会の今後の検討課題について	2011.8.23	水俣学現地研究センター
第17回	今後の研究会のあり方	2011.10.1	水俣市婦人会館
第18回	代議員会議事録の読み解き	2011.11.26	水俣学現地研究センター
第19回	代議員会議事録の読み解き	2012.1.28	水俣学現地研究センター
第20回	代議員会議事録の読み解き	2012.3.21	水俣学現地研究センター
第21回	「職場安全衛生のあゆみ」検討	2012.4.28	水俣学現地研究センター
第22回	中止	2012.6.16	水俣学現地研究センター
第23回	「職場安全衛生のあゆみ」検討	2012.11.10	水俣学現地研究センター
第24回	今後の研究会のあり方	2013.2.21	熊本学園大学第3会議室
第25回	成果報告　研究者6名による （花田・磯谷・鈴木・富田・福原・石井）	2013.12.8	水俣学現地研究センター

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar07

（iv） 水俣学勉強会

第12回～16回　2010年4月19日～7月5日、全5回

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/activity/activity.php?catg=msm

（v） 天草環境会議

【2010年度】第27回　2010年7月10日～11日、全2日間
【2011年度】第28回　2011年7月9日～10日、全2日間
【2012年度】第29回　2012年7月7日～8日、全2日間
【2013年度】第30回　2013年7月13日～14日、全2日間
【2014年度】第31回　2014年7月12日～13日、全2日間

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar11

（vi） 国際研究交流協定の締結

【2010年度】
EARTH(タイの環境 NGO、環境公害問題のシンクタンク的研究機関)との包括的研究協力協定を2010（平成22）年9月20日にチュラロンコン大学において締結した。

【2014年度】
タイ・チュラロンコン大学「平和と紛争研究センター」と熊本学園大学水俣学研究センターは、学術交流協定を2015（平成27）年2月20日にチュラロンコン大学において締結した。

（vii）海外研究者の受け入れ

【2010年度】2011年3月2日～7月31日　日本財団 API フェローに基づき、タイから、バンペン・チャイヤラック（所属：文化環境調査協会）のホスト機関として客員研究員として受け入れ、研究調査協力および指導を行った。

【2011年度】2011年11月20日～25日　中国清華大学水俣調査受け入れ
熊本県エコセフ協会など実行委員会主催の「アフリカの子どもの日 in Kumamoto」の一環として、チャールズ・ムリガンデ駐日ルワンダ大使夫妻や各国の留学生ら約50人の水俣研修を受け入れた。1月には、ミャンマー Zaw Aung 氏: Senior Research Fellow of API Fellowship (2013-2014)、ドイツ Veronika Bereznoj 氏：ハイデルベルク大学アジア学科日本学・ロシア学専攻を受け入れ研究調査・協力及び指導を行った。

【2012年度】2012年7月～2013年1月　日本財団 API フェローに基づき、タイからワライポン・ムークスワン（所属：Ecological Alert and Recovery –Thailand）の受入れ、研究調査・協力および指導を行った。

【2014年度】海外からプサン外語大、アジア経済研究所や長崎短期集中プログラム「アジア＝平和と人間の安全保障大学連合」など、研究者の受け入れを実施した。とくにJICAや海外の研究機関からの研究や訪問調査を積極的に受け入れた。
2014年7月17～20日、台南、台湾におけるダイオキシンならび水銀汚染による環境破壊と被害補償及び復元に関する現地調査を大学院生も含めて行った。

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international05

（viii）その他

【2010年度】 年間を通じてJICA研修、6月台湾成功大学水俣研修・視察、8月筑波大学付属高校研修受入れ、11月筑波大学生存学研究センター研修・視察、甲南女子高校研修受入れ、3月法政大学研修などを受け入れた。
【2011年度】 年間を通じてJICA研修・視察、4月熊本県民テレビアナウンサー水俣研修、7月慶応大学研修受入れ、10月第26回労働資料協総会、11月中国清華大学水俣研修、2012年3月人権啓発全国集会などを受け入れた。
【2012年度】 年間を通じてJICA研修、紀伊国屋書店水俣研修、佐賀大学公開講座受け入れ、志文会宇城支部、筑波大学付属高校、人権教育高校教員研修、埼玉大学水俣研修、県教組臨任部人権教育水俣研修などを受け入れた。
【2013年度】 年間を通じてJICA研修、現地研究センターでは大学の研究者による聞き取り・資料閲覧（佐賀大学、立命館大学、九州大学、法政大学、東京学芸大学、長崎大学、群馬大学）、水俣病問題に関する研修受け入れ（福島大学うつくしま未来センター、憲法を活かす熊本県民会議、埼玉大学、筑波大学、七城小職員、福島県教組、上小職員、社民党島原総支部、福島大学、大分県教組、鳥取大学、東京家政学院大学）などを受け入れた。
【2014年度】 年間を通じてJICA研修、大学の研究者による聞き取りや資料閲覧（法政大学、佐賀大学、九州大学、大分大学、大阪市立大学、中央大学、金沢大学、一ツ橋大学、慶応大学、福岡国際大学、アジア経済研究所、新潟大学、岡山大学、京都大学、四日市大学、長崎大学、龍谷大学、神奈川大学、東京学芸大学、国際基督教大学、プサン外語大学、あおぞら財団）、水俣病問題に関する研修（熊本県西原村、熊中学校、直方、清和中学校、水俣市人権教育、国会議員団、大阪弁護士会、福岡国際大学、アジア経済研究所、宮城、あおぞら財団、甲南女子高校、新潟大学渡辺ゼミ、阪南中央病院、京都大学、芦北人権教育、長崎大学、国際医学生連盟、済々黌校SGHS）などを受け入れた。

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international04